

# 瀬人V S キサラ～時空を超える記憶～【完結後、後日談ぼちぼち執筆】

生徒会副長

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「あらすじ」ある夜。瀬人は、自分が眠っている間に3枚の『青眼の白龍』を盗んだ、仮面の女とデュエルをする。その女の正体は、闇に堕ちた4枚目のブルーアイズ（キサラ）だった。敗者が死に至る『Sin World』におけるデュエルで、瀬人はキサラを闇から救うことができるのか。入れ替わり立ち替わり、攻撃力3000以上のモンスターがフィールドに君臨し続ける大迫力のデュエル！ 是非お楽しみください。

※この作品は、ハーメルンとpixivで二重投稿しております。  
検索用：Sin 青眼の白龍、Sin、悪堕ち、闇堕ち、遊戯王DM、  
デュエルSS、架空デュエル、海馬瀬人、瀬人キサ、セトキサ、デュエルモンスターズ、遊戯王5D、S

目 次

TURN 0—1 「奪われたブルーアイズ」	1
TURN 2—3 『Sin 青眼の白龍』	
TURN 4—5 『青き眼の乙女』	
TURN 6—7 『蒼眼の銀龍』	
TURN 8—9 『青眼の究極竜』	
TURN 10—11 『終わりの始まり』	
TURN 12 『龍の鏡』	
LAST・TURN 『魂の解放』	
TURN・END	
NEXT・TURN (最終回)	
EXTRA・TURN 「キサラVSドッペルゲンガー」(オリカなし新マスターール2019)	
TURN 0 「未領域のドッペルゲンガー」	
TURN 1 『青眼の精霊龍』	
TURN 2 『手札抹殺』	
TURN 3 『拮抗勝負』	
TURN 3—4 『No. 77 The Seven Sins』	
TURN 4—5 「罪と神と真」	
TURN・END	

## TURN0—1 「奪われたブルーアイズ」

気がつけば、海馬瀬人は見知らぬ砂丘に独り立っていた。照りつけるような日差しと全てを焦がすような陽炎が目に映るにもかかわらず、何故か熱さに対する感覚は鈍い。

風が吹き荒む向こうに、黒いマントと仮面の男の姿がおぼろげに見えた。男が手を空に掲げると、そこから妖しい雷光が発せられる。瀬人の手に武器はない……。ただ身構えることしか出来ない彼が覚悟を決めたその時——。

1人の、銀髪の美女が前へ躍り出た。

彼女は、瀬人を護るために、瀬人の盾として、その身を雷光に貫かれた——。

倒れる彼女を、すかさず受け止める。

すると彼女は——生来蒼く澄んでいる筈の眼を血で紅く染めて、瀬人を睨みつけた。

「——？　——ツ！」

何を叫んでいるかはわからない。しかし、彼女の絶望と、瀬人に对する想いの強さだけは分かつた気がした。

次の瞬間——。

「——!!」

断末魔を上げる彼女の身体から青い焰が燃え上がり、断末魔は巨龍の咆哮となつた。

『なつ……!?』

今まで明確に分かる音がなかつた空間に、彼自身の驚きの声が洩れる。

何故ならその巨龍の姿は——。

(ブルーアイズ!?)

自分が最も信頼するしもべ、青眼の白龍に他ならない。それが自分に牙を剥いている……。

なぜ？ どうして？

理由が分からぬまま、瀬人の身体はブルーアイズの光撃に飲み込

まれた

\*

ツ  
・  
・  
・  
!

目が覚めると、そこはいつもと変わらない、社内の仮眠室だつた。瀬人の額に、汗が鬱陶しくへばりついている。枕元のデジタル時計は、午前2時を知らせていた。

——またあの夢か……」

彼——海馬コーポレーション社長、海馬瀬人は、数日前から悪夢にうなされていた。夢は儂く、そのヴィジョンはおぼろげにしか覚えていないが、はつきり覚えていることが一つある。

所詮はくだらない夢に過ぎぬと、瀬人はいつものように切り捨てる  
こととした。

瀬人には目標があつた。彼が生涯のライバルと認めた決闘者——アテムが冥界に還つた今こそ、『世界海馬ランド計画』という人生最大の目標を、一層推し進めていかなければならぬ。こんな幻影に気を遣つてはいる余裕など、彼にはないのだ。

一度払いのけた布団に手をかけた時、仕事用の電話がけたたましく鳴りだした。

チツ

世界を股にかける大企業には、よくあることである。

彼は渋々受話器を取つた。

「俺だ。何の用だ？」

受話器の向こうにいるのは、彼の一番の腹心——磯野のはず。そう見越して簡潔に訊ねた。しか。

「こんばんは……。海馬瀬人」

何故だろう。女の声がした。

「貴方に名乗れる名前はない……。まあ仮に、シンと名乗つておきま

「……」

あまり女らしくない名前だ……という感想を抱く。思い当たる節もなかつた。

「……要件はなんだ」

「今から、私とデュエルをして下さらない？」

「デュエルだと？」

『デュエルにおいて、いつ何時であろうと、誰の挑戦でも受ける』——そういう信念を、彼は一応持つてゐる。しかし今は、草木も眠る丑三つ時だ。

「休養も仕事の内……。俺は忙しい。その挑戦、日を改めれば、受けてやつてもいいぞ？」

「負けるのが怖いのかしら？ それとも、貴方のしもべには雑魚しかいないのかしら？」

その挑発は、海馬瀬人の闘争心に火を灯すには十分だつた。

「ふうん！ ブルーアイズの存在を無視して俺のカードを雑魚呼ばわりするとはいひ度胸だ！」

一瞬、あの悪夢のことが瀬人の頭をよぎつたが、関係のないことだと思つてゐた。次に、相手が言葉を発するまでは。

「青眼の白龍？ そんなカード、貴方のデッキに入つてないわよ？」  
ブルーアイズの悪夢。こんな深夜の挑戦者。意味ありげな口振り。  
(……まさか!?)

彼はすぐにデッキを確認した。ブラッド・ヴァ尔斯、X—ヘッド・キヤノン、収縮、エネミーコントローラー、最終突撃命令、異次元からの帰還……。

……ない。

海馬瀬人が最も信頼するカード、青眼の白龍は——どこにもなかつたのだ！

「貴ツ様アアアア!! 僕のブルーアイズを何処へやつた!? 絶対に許さんぞ!!」

深夜であることなど意識の外にやつて、瀬人は怒声を上げる。

「ふふふ……。取り返したければ、屋上にいらして下さい。そして運

命のデュエルを愉しみましょう？

貴方とブルーアイズの——運命を決めるデュエルを!!

「ちいっ！」

乱暴に瀬人は通話を切る。

自分で決めたものならいざ知らず、他人に決められた運命のデュエルなど、彼にとつては至極どうでもよかつた。しかし、それでも彼を突き動かしたのは——。

（ブルーアイズこそ俺の光。ブルーアイズこそ俺の魂。そして——俺とモクバの、絆の象徴。何としても取り返す!!）

彼の意志は刀より鋭く、ダイヤモンドよりも固かつた。

瀬人は、己の象徴のひとつである白いコートに袖を通して、氣を引き締める。ブルーアイズを取り戻す為、デッキを再編成する。

左腕に決闘者の盾、デュエルディスクを装着すると、彼は戦場へと、走り出した——。

＊＊

屋上にやつてきた彼を迎えたのは、黒雲渦巻く暗い空と……。

「お待ちしております……。海馬瀬人」

モノクロ模様の仮面を被つた女だつた。声だけでなく、腕の細さや衣服の凹凸を見れば女であることはわかる。仮面の外には長い銀髪が、黒のグラデーションを深めながら真っ直ぐ下りる。うなじと美しく張り出した乳肌に目をやれば、そのいずれもが、大理石のような輝く白さを見せている。乳肌は途中から、蝙蝠の翼のような暴力性と身軽さを孕んだ黒のドレスで隠されていた。

「ふうん……。逃げることなくデュエルに臨む潔さは誉めてやる。だが、俺のブルーアイズを奪つた罪は言い逃れできんぞ！」

「罪から逃れられないのは貴方のほうよ！」

瀬人に心当たりはなかつたが、相手の気迫に一瞬気圧された。

「貴方はかつて、大きな罪を犯した。貴方だけじゃない。私も含めて……全ての人、全てのカードは今、大きな罪を背負つている。私は、それを無に帰すためにここへ来た……」

「そんな戯れ言はどうでもいい。過去の罪など俺には関係ない。俺が

見据えるものは、未来へのロードのみ！　俺の未来を照らす光、ブルーアイズは返してもらうぞ！」

瀬人は空に左腕を掲げる。その動作に反応し、デュエルディスクは臨戦形態に変形した。

「いいえ……。未来に光などないわ。あるのは底知れぬ罪と絶望だけ……。それを、デュエルで教えてあげる！」

いまこの時の両者間においては、理解にも交渉にも至る余地はない。互いに、考えることは同じだった。

(――決闘者なら、カードを以て己を語るのみ！)

青眼の白龍を巡るデュエルが、幕を開ける――。

『――デュエル!!』

海馬瀬人／LP4000（先行）

『VS』

シン／LP4000

「俺の先行、ドロー！」

手札から『サンダー・ドラゴン』を捨てることで、デッキから新たな『サンダー・ドラゴン』を2枚、手札に加える！

ブラッド・ウォルスを召喚！

これでターンエンドだ！

瀬人LP4000／手札6枚／伏せ0枚  
ブラッド・ウォルス／攻1900

## TURN2—3 『S·in 青眼の白龍』

瀬人LP4000／手札6枚／伏せ0枚

ブラッド・ヴァルス／攻1900

伏せカードがないとはいえ、瀬人の場にいるのは下級モンスターで最高級の攻撃力を持つ『ブラッド・ヴァルス』。だがシンは、それを歯にもかけず、自分のターンを始めた。

「私のターン、ドロー！」

……手札が悪いわね。『手札抹殺』の魔法カードを発動！』

「ふうん、威勢のよさの割には手札事故か！　いいカードの一つでも引いてみるんだな！」

互いの手札を確認した後、墓地へと送る。

『瀬人が捨てたカード：6枚

サンダー・ドラゴン×2、

ボマー・ドラゴン

ゴブリンのやりくり上手

ロード・オブ・ドラゴン

ドル・ドラ

『シンが捨てたカード：5枚

S·in 真紅眼の黒竜

S·in レインボー・ドラゴン

S·in トゥールス・ドラゴン

ダーク・アームド・ドラゴン

伝説の白石

シンの『手札抹殺』は、手札事故からの脱出以外にも、明確なメリットとなる狙いがあつた。

「いま捨てた『伝説の白石』の効果発動！　このカードが墓地に送られた時、その過程を問わず、強制的に、デッキからこのカードを手札に加える！」

その時、シンが手札に加えたカードを見た瞬間、瀬人の中改めて、実感が湧いた。

彼の命とも言えるカードが、奪われたという事実が——。

「この……『青眼の白龍』を！」

「ブルーアイズ……！ それは俺のカードだッ!! 必ず取り戻す！」

事実をその眼に突きつけられ、彼の闘志はさらに燃え上がった。だがシンは、怯むことなく反論する。

「それは不可能よ。貴方は、他ならぬ……ブルーアイズ自身の力で敗北するのだから！」

フィールド魔法、罪深き世界——『SinWorld』を発動！

そのフィールド魔法が発動されると、ソリッドビジョンの範疇を超えた変化が現れ始めた。

最初に起こつたのは、デュエルディスクから発せられる黒い電撃。それが、上空・右翼・左翼の三方向に放たれるとそこから世界の色が変わっていく。それは人を惑わすような紫色の銀河。元あつた世界は、青と橙で「線」の輪郭のみを残し、「面」としての個性は侵食されて消えた。

そして、目には見えない重苦しさが辺りに漂う。瀬人はこの感覚に、心当たりがあつた。

(似ている……。『オレイカルコスの結界』に……)

『オレイカルコスの結界』とは、彼が以前戦つた『ドーマ』と呼ばれる組織が使っていたカードだ。デュエルの敗者の魂を封印する効果があり、瀬人もその身を以てその力を味わっている。

「このフィールド魔法が発動している時、ターン開始時のドローを放棄することで、デッキから『Sin』と名の付くモンスターをサーチ出来る。だけどこの効果はおまけ……おそらく使うことはないわ」

その先にある効果に、瀬人は直感で気づいた。

『SinWorld』のもうひとつ効果！ デュエルに敗北した者は、その魂を打ち碎かれ、死に至る！

「くっ！ やはり……！ 当たつて欲しくはなかつたが……」

デュエルを命のやり取りに使うなど、軍事産業を潰し、ゲーム産業に取り組んできた彼の信念が許さなかつた。

「そんな手段に頼るのはよせ！ 僕が敗北するなどありえん！ 貴様

が後悔することになるぞ！」

アテムや遊戯などとの出会いや、多くのデュエルを通して彼は変わった。たとえ怒りに燃えることこそあれど、ゲームと称して人の命を弄ぶような真似を、絶対に許さないように。

「そんなことはないわ。貴方がこれ以上未来へ進んでも、待っているのは罪と絶望だけ。私にとつても、貴方にとつても……世界にとつても！だから私に、後悔はない！」

「貴様ア！俺が創りあげる未来が、世界に罪と絶望を喚ぶというのか！そんなことは、ありえん！」

「信じる信じないは貴方の勝手よ。私には勝算がある！」

『SinWorld』の効果に恐れをなす様子も見せず、シンはデュエルを開いた。

「まずは永続魔法『魂吸収』を発動！カードが1枚除外されるたびに、私のライフが500ポイント回復する。

そして！ デッキに眠る2枚目の『青眼の白龍』をゲームから除外することで、このモンスターを特殊召喚する！

最初にソリッドビジョンのカードから現れたのは、瀬人のよく知る『青眼の白龍』だった。しかし、それは本命の召喚のコストに、ベースに過ぎない。

「何？なんだ、その召喚条件は！」

「見せてあげるわ！『青眼の白龍』のもうひとつ姿――。罪と絶望を知り、それを変えるために現出した姿――。現れよ！『Sin青眼の白龍』!!」

何処からか現れた黒い兜がブルーアイズに被せられ、美しい白銀の翼がモノクロ模様に変わり――『Sin青眼の白龍』に姿を変えられてしまつた……。

シンLP40000→4500

Sin青眼の白龍／攻3000

「よくも……！ よくも俺のブルーアイズを、こんな姿に!!」

己が魂も同然のカードを汚され、瀬人は怒りと悲しみに震えた声を上げる。しかしシンの表情は、彼以上にその感情を表現していた。

「……貴方は、『青眼の白龍』をもつと酷い姿にしたことがあるはずよ。その罪を、この一撃で思い出させてあげる……。バトルフェイズ！」

『S·in 青眼の白龍』で、『ブラッド・ヴァルス』を攻撃！』

姿形こそ、青眼の白龍とは違う。しかし、その口腔に収束する輝きは、青眼の白龍のものと寸分も違わないーー。

「誅滅の爆裂疾風弾!!」

強烈な攻撃を受け、『ブラッド・ヴァルス』が破壊される。

ブラッド・ヴァルス／攻1900（破壊）

『V.S』

S·in 青眼の白龍／攻3000

瀬人 LP40000→2900

「ぐつ……！」

それでもなお止まらない攻撃の余波に、海馬瀬人は飲み込まれたーー。

\* \*

『……くん、海馬くん……！』

瀬人が気がつくと、夢の中のようなぼやけた風景に、誰かが立つていて、その人物の声が木霊していた。その誰かの正体に、瀬人は間もなくたどり着いた。

（あのぼやけた人影は、もしや遊戯？　なぜこんなところに突然……？　俺は、白昼夢でも見ているのか……？）

『じいちゃんに、いつたい何をしたんだ!?』

（……何の話をしているんだ？）

何の脈絡もなくそんな質問をされても困る。瀬人はそういつた主旨のことを言おうとしたのだが、彼の口は勝手に動いた。

『別に？　互いの一番大切なカード賭けて、少々刺激的なデュエルをしただけさ。ジジイには耐えられなかつたようだがね』

瀬人は……自分が過去に吐いた台詞を覚えていた。そして、次に何が起ころのが、ということも。

『そのデュエルに勝利したことで手に入れた、このカード……』

1枚のカードが、彼の視界に入る。

(や、めろ……。やめろおおおおお!!)

『4枚目は敵になるかもしけないからなあ!!』

破り捨てられた、否、破り捨てたカードの姿を目に焼き付けながら、瀬人の視界は黒く染まっていく。

あんなに求めていたのに。あんなに憧れていたのに。あんなに愛していたのに――。

＊＊

「――思い出したかしら？貴方の罪を」

気がつけば、瀬人は『SinWorld』で塗り替えられた屋上に戻っていた。

「おのれ……。人のトラウマにつけ込むとは……。」

あれは過去にあった事実だつた。当時の瀬人には、頼れる味方も、誇れる力もなかつた。そんな中で、誰よりも強くあろうとする一方、自分を超える者の登場に怯えていた彼は、4枚目の『青眼の白龍』を破り捨てた。

そして……あの時彼が恐れていたことが、いま現実のものになつている。

(ブルーアイズが、俺の敵として立ちふさがつている……!)

「カードを1枚伏せ、エンドフェイズに速攻魔法発動。『超再生能力』！このターンに手札から捨てた、または生贊に捧げたドラゴン1体につき、カードを1枚ドローする。

手札抹殺で5体のドラゴンを捨てたから、5枚ドローさせてもらうわ。これで本当にターンエンド。

さあ選びなさい、海馬瀬人。ブルーアイズの力によつて未来を失うか、同じ罪を繰り返すか！

シンLP4500／手札6枚／伏せ1枚

Sin 青眼の白龍／攻3000

SinWorld

魂吸収

「俺のターン、ドロー!!」

彼は究極の選択を迫られていた。シンが示した選択肢は2つ。

——海馬瀬人の敗北か、青眼の破壊か。

敗北は許されない。負ける気はない。モクバのため、己の夢のために。

そして——ブルーアイズも、そんな結末は望んでいないと、彼は信じている。

だが彼が勝つには、あのブルーアイズを倒すしかない。第三の選択肢を導き出せる手札は揃つていなかつた。相手の手札の枚数から考えて、問題の先延ばしをする訳にもいかなかつた。

(俺は多くの出会いを通して変わつたはずだ！ アテム、遊戯、そして何よりブルーアイズ！

——にもかかわらず、俺は、またあの罪を繰り返すのか？)

無力、罪悪、苦悩。様々な感情が彼の中で渦巻く。

その結果——悲しい決断をする他なかつた。

「——ブルーアイズよ。こんな手段に頼るしかない俺を許してくれ……」

そう小さな声で詫びると、彼はメインフェイズに移つた。

『X—ヘッド・キヤノン』を召喚！ さらに装備魔法『巨大化』により、攻撃力を2倍にする！

X—ヘッド・キヤノン／攻1800→3600

シンのフィールドにいる、強き命と生きる悲しみの象徴とは対称的に、無機質で近代的な瀬人のモンスター。カード効果で巨大化し、敵に銃口を向けている。

「バトルだ！『X—ヘッド・キヤノン』で、『S·in 青眼の白龍』を攻撃！ X—ディストラクション！」

レーザーの弾丸は敵に見事命中する。そして、巨大な爆風が、モンスターとプレイヤーに襲いかかつた……。

S·in 青眼の白龍／攻3000（破壊）

『VS』

X—ヘッド・キヤノン／攻3600

シンLP4500→3900

ただ攻撃力で上回つただけのバトル。凡骨並みのタクティクス。

あまりに、彼にとつては虚しいバトルだつた。

「すまない、ブルーアイズ……。リバースカードを一枚伏せて、ターン  
エンドだ！」

瀬人 LP2900／手札4枚／伏せ1枚  
X—ヘッド・キャノン／攻3600

→巨大化

「やはり……。貴方は、第三の選択肢を示すことができなかつた」

爆風の向こうから、悲しそうな声が聞こえてくる。

「これで確信したわ……。貴方が創りゆく未来は、罪と絶望で満ちる  
ということを」

爆風が晴れていく。シンと名乗つた彼女の仮面はひび割れており、  
一片、また一片と崩れ落ちていく。

「だから、諦めさせてあげる。貴方のロードを、終わらせてあげる  
……。」

仮面の下に隠されていた、美女の顔。瀬人は彼女を、知つてゐる。  
それは、もう二度と会えないと思つていた相手だつた。

「貴方を……愛しているから……」

海のように澄んでいたはずの青い瞳は、黒く濁り、目元には涙の跡  
のような黒い刺青があつたが、間違いなくその人だとわかつた。

「キ、サラ……だと？」

## TURN4—5 『青き眼の乙女』

瀬人 LP2900／手札4枚／伏せ1枚  
X—ヘッド・キヤノン／攻3600

→巨大化

キサラ LP3900／手札6枚／伏せ1枚  
モンスターなし

魂吸收

S i n W o r l d

「キ、 サラ……だと？」

「あら？ 貴方の口からその名前が出るとは思わなかつたわ」

瀬人とキサラと出会いは、この現実での出来事ではない。

猿良の挑戦を受けて訪れたエジプトで、瀬人は三千年前のエジプトをモチーフにした仮想世界に迷い込んだ。

その時に、彼女——キサラと出会つた。

なぜそれを憶えているのかというと、仮想世界上の人物で、唯一コミュニケーションを交わせた存在だつたからだ。

そしてもうひとつ。キサラが、その身体に『青眼の白龍』を宿していたからだ。

「——貴様は……。いや、お前は……いつたい何者なんだ？」

『キサラ』の名を知つてゐるなら、もう貴方の中で答えは出でているんじゃない？」

逆に問い合わせられて……まさかとは思いつつ、瀬人はそのありえない仮説を口にする。

「お前は——青眼の白龍、なのが？」

「——私のターン、ドロー！」

彼女は答え合わせに応じず、デュエルを進めた。

「答える！ お前がブルーアイズだというのなら、なぜ俺を殺そようとす!? 黒幕は誰だ!!」

『青き眼の乙女』を通常召喚！』

青き眼の乙女／攻0

「なつ……」

疑問が解決するより早く、新たな衝撃が与えられる。召喚されたカードもまた、キサラによく似ていたのだ。ただ、キサラが薄幸の少女なら、こちらは多幸の乙女と言えそうな雰囲気だが。

「このカードは、私が闇に染まつた時に零れ落ちたカード！　当然、私と縁ある能力を持つている！　それは——カード効果、もしくは攻撃の対象になつたとき、『白き龍』を呼び出す能力！

さらによりバーストラップ、『スキル・サクセサー』を発動！　『青き眼の乙女』を対象に選択！　その攻撃力が400ポイントアップ！　これが何を意味するのか——分かるわよね？

紅いオーラが『青き眼の乙女』に降り注ぐ。買カードから力を受け、目を閉じて祈りを捧げる『青き眼の乙女』の身体から、白銀の大翼が飛び出した。

「さうに手札から『S·in·パラレルギア』を捨てることで、魔法カード『D·D·R』を発動！　除外していたモンスター1体を特殊召喚する！」

戦場に集え！　2体の——『青眼の白龍』!!

フィールドに静かに降り立つたのは、紛れもない、穢れなき本物のブルーアイズ2体だつた。彼女の背で、対をなして左右に並ぶ。

S·in·パラレルギア（手札→墓地）

青眼の白龍／攻3000（デッキ→場）

青眼の白龍／攻3000（除外→場）

そこで、瀬人は気がついた。今まで公開されたブルーアイズは、3枚。

「これで——これで準備は整つたわ！　手札から『融合』を発動！　手札の1枚と、フィールドの2枚！　合計3枚の『青眼の白龍』を融合する！」

今までイラストを見せつけられた3枚の『青眼の白龍』、その全てが、瀬人のものだつた。それが今、1つに束ねられ、強い光を、新たな生命の誕生を告げる光を放つ。

「強靭・無敵・最強たる竜よ！　今ここに具現し、滅びの未来とともに、

真のブルーアイズの所有者を示せ！

融合召喚！ 降臨せよ！『青眼の究極竜』!!』

白き龍よりも凶暴で、より鋭く、より美しい姿をした究極の兵器が、三首で瀬人に向かつて吼えた——。

青眼の白龍×3（墓地へ）

←

青眼の究極竜／攻4500

「まさか——貴様は……！」

彼女が、キサラが『青眼の白龍』であるとすれば、それは自分が持つていた3枚とは無関係の——。

「4枚目の、ブルーアイズ……!?」

「やつと、気づいたようね……」

彼の答えは、眞実と一致した。

「お前が俺を殺す理由は、復讐か？」

殺された、破り捨てられた恨みを晴らしにきたのか。瀬人はそう考えたが、キサラはそれを肯定しなかつた。

「まさか。今でも、あなたのことば愛している。だからこそ、力と己を信じて突き進むあなたが、破滅の未来に至るのを見ていられなかつた。この一撃が、あなたの心に届き、闘志を碎くことを祈つているわ」「どういうことだ？」

「究極竜の一撃で、『S·i·n青眼の白龍』の時のように、あなたに1つのヴィジョンを見せてあげると言つているのよ」

そこまで教えると、キサラは一息ついて、手札のカードに手をかけた。

「まずはその下準備ね。魔法カード『スタンピング・クラッシュ』を発動！ 味方のドラゴンの力により、相手の魔法・罠を1枚破壊し、さらに500ポイントのダメージを与える！」

キサラは伏せカードとX→ヘッド・キャノンを交互に見やり、

『巨大化』の破壊を狙うのはちょっと博打ね。伏せカードを破壊するわ！」

そう宣言して瀬人が伏せたカードを指差した。その命令に従い、究

極竜は暴風を起こしながら天へ舞つた。その後の着地が生み出す衝撃は、瀬人の伏せたカードを粉碎するだろう。しかし瀬人は、風に立ち向かい、キサラに抗つた。

「ならば、チエーン発動しておく！『リビングデッドの呼び声』！ 墓地から『ドル・ドラ』を蘇生召喚！」

一説には竜の長老とも噂されるドルドラだが、やつれた印象が否めない。攻撃表示であるにもかかわらず、これから訪れる運命と役割に怯えている様子が伺えた。

「破壊された『ドル・ドラ』は、エンドフェイズに能力を下げて自己再生するのでな……」

「なるほどね。でもダメージは受けてもらうわ！」

究極竜が降り立つと、地は震え、風は瀬人とカードを圧し潰さんばかりの勢いで殺到する。

リビングデッドの呼び声（破壊）

ドル・ドラ（破壊）

瀬人 LP2900→2400

「くつ……！」

「これで私の『青眼の究極竜』を妨げるものは何もない！」

『スタンピング・クラッショ』の余波でよろめく瀬人の隙を、キサラは逃がさない。

「バトル！『青眼の究極竜』で、『X—ヘッド・キヤノン』を攻撃！」

3つの首がそれぞれエネルギーを放出し、1つの巨大な光弾を完成させる。全てを滅ぼす、その究極の一撃の名は――。

『究極爆裂疾風――アルティメット・バーストオツ!!』

青眼の究極竜／攻4500

《VS》

X—ヘッド・キヤノン／攻3600（破壊）

瀬人 LP2400→1500

『X—ヘッド・キヤノン』の散り様は、壊された、倒された、などという域を超えていた。残骸こそ墓地にあろうとも、蒸発した、消え去つたという域のものだ。当然、瀬人も無事では済まない。

「ぐつ……ううつ……!!」

感覚を消し去るような熱と閃光を感じながら、瀬人は意識を手放した……。

\* \*

瀬人の覚醒と比例して大きくなる響き。それは、拍手喝采の音色だつた。

『お見事です、不動博士！ 貴方が開発した『モーメント』は、人類進化の、源泉と象徴になることでしょう！』

瀬人の目の前には、大きく跳ねた髪型をした、白衣の男性がいた。そして2人を、研究者やマスコミと思われる大勢の人が囲んでいる。カメラのレンズは、2人の他に、その傍にある機械にも向けられていた。

(話の筋から察するに、目の前の男が『不動博士』で……。この、光輝くリングを持つ機械が『モーメント』なのか?)

瀬人がそこまで想像したところで、不動博士は彼に手をさしのべてきた。温和な表情も相まって、反射的に握手で応えた。すると、歓声が更に大きくなつた。

『モーメント、万歳!!』

『デュエリストに進化あれ!!』

『海馬コードボレーシヨンに栄光あれ!!』

同時に、不動博士の手を介して、瀬人の頭脳に知識が流れ込んできた。

モーメントのこと、デュエルのこと、歴史のこと……。

それらを理解したとき、瀬人は――。

「フフフ……ふはははははは！」

笑わざにはいられなかつた。全てが順調。全てが理想の、最善の軌跡を描こうとしているのだから。

(デュエルからエネルギーを得て回転する、夢の永久機関『モーメント』！ これだ！ これさえあれば、資源を巡る醜い戦争は消え失せる！ 世界海馬ランド計画に必要な、エネルギーと資産を確保できる

!! 僕の夢と理想は――完成を見る!!)

彼の夢は膨らみ、進化は加速する。

それに比例して、モーメントも光り、回転する。

さんさんと。くるくると——。

惨惨と。狂狂と——。

(――うん?)

瀬人は今ごろになつて異変に気づいた。モーメントは先ほどまで、豊かな虹色を見せながら回転していたはずである。それが、いまは白色を放ち、回転も逆になつていてる。

「いつたい……何が……?」

瀬人の理解よりも遙かに早く、モーメントの逆回転は加速する。光量も同時に増していき——。

「うつ!? なんだ……この光は!!」

それは爆発だつた。彼が、人間が進化の末に辿り着いた世界とモーメントは、膨らみ過ぎた欲望によつて弾けた。過剰な空気で膨張した風船が破裂するように。

閃光が止んだ後に残つた景色は、地獄絵図だつた。

「なんだ……これは……」

天に向かつて伸びていたビル群は、傾きながら傷だらけの外壁を晒す。地には大きな亀裂が疾り、老若男女を問わず、溶岩の奈落へといるなう。

それを気にする様子もなく、機皇帝による殺戮、人間同士の略奪が、休むことなく行われている……。

この世界には、この未来には、夢も希望もなかつた。

あるのは——底知れぬ、罪と絶望だけ……。

\* \* \*

「これが……俺の創る未来……?」

「そう。これが、貴方の創る未来……」

仮想現実からデュエルの舞台に戻つた瀬人は、まもなく両の膝をついた。先ほど見たヴィジョンを、妄想と称して切り捨てるることはできなかつた。何故なら——。

(あれは——映像の中での俺だけでなく、今の俺が客観的に見ても、最

善の選択によつて創られた未来……）

その行く末が、罪と絶望で満たされた、あの世界なのである。かと言つて、モーメント無くして瀬人の夢が叶うものか。モーメントを超える存在を、生み出すことなど出来るものか……。

「あのヴィジョンの、罪と絶望で満たされた未来を回避する道は2つ」苦悩の中で、すんなりと彼の耳に染み入つてくる。2本の指を立てる、キサラの声が。

「自らの罪を悟り、重ねながら、無為に生きるか。それとも——ここで朽ち果てるか。後者を選ぶというなら、私が『キサラ』と『青眼の白龍』の名の下で、引導を渡してあげるわ」

『青眼の究極竜』を背に従えたキサラの、あやすような語りかけに、最早——瀬人は屈し始めた。

（それも——いいかも、しれんな……。力強く歩むほど、罪を重ね、絶望へと近づく俺のロードなど……いつそここで、美しく幕を下ろしてしまえば……）

力なく首を垂らす瀬人の姿を、キサラは悲しげな笑みを浮かべながら見つめていた。

「もはや闘志も折れたようね。サレンダーさせてあげてもいいけれど……私のバトルフェイズは、まだ終わっていないわ。

『青き眼の乙女』！『スキル・サクセサー』で得た400ポイントの攻撃力を短剣に換えて、瀬人の命を絶ちなさい！」

命令を受けた美女は、その柔軟な雰囲気に似合わない凶器を具現化する。しかし、ガタガタと震えるばかりで、戦いに赴こうとしない。「どうしたの!? それが瀬人の為であり、瀬人もそれを望んでいるのよ！ 早くしなさい!!」

罪に墮ちたデュエリストに命じられ、美しい青い眼の娘は、操り人形のようにぎこちない足取りで、瀬人に歩み寄る。

「キサラ……」

裁きを待つ罪人は、両膝を着いたまま彼女を見上げる。丁寧に編まれた銀髪、優しさと愛情で満たされた豊かな肢体、透き通る青い瞳。彼女に看取られて、彼女の手で死ねるのなら本望だと、彼は心から思

えた。それなのに。

(なぜ……お前は、泣いているのだ……?)

彼女は大きな眼に涙を溜め込んで、悔しげな、悲しげな表情で瀬人を見つめていた。

「さようなら、瀬人……。『青き眼の乙女』で、瀬人にダイレクトアタック!!」

決闘者の命令の下、ナイフを両の手で構える時も、彼女の表情は変わらなかつた。このままいけば、短剣は彼の眉間に刺さる。その一連の流れの中、一滴の零が——瀬人の頬についた。

(これは……キサラの、涙……?)

その熱い涙に触れたとき、瀬人の時間は止まり、意識は再びヴィジョンの中へと落ちる。

それはかつて、彼と彼女が紡いだ記憶——。

\*\*\*

初めて出逢つたとき、彼は平民の少年で、彼女は難民の少女だつた。盗賊に囚われていた彼女を救い出したときに放つた言葉を、彼は今でも覚えていた。

『俺はいつか大物になる! 戦争で死んだ 父さんの分まで、国と母さんのために、デカい仕事をするんだ!』

『だからその日まで、俺の名前を覚えておけ! そして、お前に酷いことをする奴に言い返してやれ!』

『私は、セトに救われた、生きる価値のある人間だ、と! 私はセトから、ここで 生きてよいという許しを得ている、と!』

『俺はお前を救つたことを誇りにする! だからお前も、俺に救われたことを誇りに生きろ!』

あれは、心から出た言葉だつた。彼が、自分の宿す力と正義を、実感できた瞬間だつた。

この行動が引き金となり、村は焼け、母は死することになつたが、後に後悔はなかつた。むしろ、正しき民草を犠牲にしなくて済むほどの力と正義を、我が身と祖国に持たせねばならないと、決意を新たにする契機となつた。

それから数年——。

神官を目指しての猛勉強と、神官としての激務に忙殺され、その志を失いかけた。

『わずかな民の犠牲など、王家の谷の石コロにすぎぬ……』  
しかし、彼女との再会や、盗賊王を巡る戦いを通して、彼は知ることが出来た。思い出すことが出来た。

結束あつての力、仁徳あつての政、親愛あつての絆だと……。  
だから彼は——全てを失つても、未来への希望を壁画に遺すことができた。

その壁画にあるのは、デイアハに臨む一人の若者の姿と、同僚と恋人。そして、友への詩。

——我是叫ぶ

——闘いの詩を

——友の詩を

——遙か魂の交差する場所に

——我を導け

その後、幾千年——。

彼は、神官の頃より幼い身体で、神官の頃以上の書物や学問と戦つていた。両親を失った彼ら兄弟が、底辺から勝ち上がるために。地獄ような日々の中、彼は1枚のカードに救われた。

弟が幼い手で描き、贈ってくれた。憧れの、最強の龍。

『俺はいつか——本物を手に入れてみせる!!』

——その数年後。

怨敵・海馬剛三郎を失い、一度彼は狂つた。あんなに憧れていたカードを、恐れのあまり破り捨てるほどに。

それでも彼は再び立ち上がった。誇り高きデュエリストとして生まれ変わることが出来た。

あのカードと共に——。

『このカードに全てを賭ける！　俺の信じたカードは——！』

『そう——神を生贊に捧げる!!』

『目覚めよ。我がデッキに宿る、青き炎の化身——！』

『喰らえ、化け物オ！ 次元を超えて俺の未来のロードを切り拓く光  
を!!』

『当然！ 俺が選ぶのは——!!』

(ブルーアイズ、キサラ……。俺とお前の出会いが生んだのは、やはり  
罪や絶望ではない！ 夢と希望だった！ 俺がお前を想い続ける限  
り、俺の歩むロードに光が絶えることはなかつた！だから俺は——  
負ける訳にはいかない！ キサラを救うこと——諦めるものか!!)

＊＊＊

繰り出された刃が散らせたのは、男の鮮血ではなく、金属が衝突し  
あつた火花だつた。

『青き眼の乙女』の攻撃を受け止めたことで、瀬人のLPが削られ  
る。

青き眼の乙女／攻400

《VS》

(ダイレクトアタック)

瀬人 LP 1500 → 1100

「——え？」

2人のキサラは驚きを隠せず、眼を丸くした。一度は膝を地に着け  
た瀬人が今の瞬間、片膝を立て、攻撃をデュエルディスクで受けたの  
だ。

『カードを1枚伏せ、私はターンを終了する。エンドフェイズに、『青  
き眼の乙女』は攻撃力が0に戻る……』

『俺の、『ドル・ドラ』を蘇生することも、忘れないでもらおうか……』

キサラ LP 3900 → 手札0枚／伏せ1枚

青眼の究極竜／攻4500

青き眼の乙女／攻400 → /攻0

魂吸收

S i n W o r l d

瀬人 LP 1100 → 手札4枚／伏せなし

ドル・ドラ（蘇生）／守1200 → /守1000

攻撃は受けたが、ライフは残っている。『ドル・ドラ』も還ってきた。  
そして鬪志も――。

「眼が覚めたよ――キサラ」

「――なんですか？」

今までになく、はつきりと。記憶の中の己自身が、何度も呼び続けた愛しき名を、時を超えて心から紡ぐ。

対する罪に墮ちたキサラは、死に損ないのものでも、苦し紛れのものでもないその口調にたじろぐ。

「もう一度と、お前を見捨てはしない。悲しませはしない……。

いつの日か、何処かで救えなかつたお前を、今度こそ救つてみせる。そのためなら、俺は何度でも立ち上がれる。生まれ変わることができる。

そして俺は、勝ち取つてみせる！　俺とキサラが、共に歩み、幸せになれる未来を!!

彼の想いと記憶は今、時空を超える――。

「俺のターン、ドロー！」

2枚のリバースカードをセット！　ターンエンドだ！」

キサラ LP3900／手札0枚／伏せ1枚

青眼の究極竜／攻4500

青き眼の乙女／攻0

魂吸収

S i n W o r l d

瀬人 LP1100／手札3枚／伏せ2枚

ドル・ドラ／守1000

## TURN 6—7 《蒼眼の銀龍》

キサラ LP3900／手札0枚／伏せ1枚

青眼の究極竜／攻4500

青き眼の乙女／攻0

魂吸收

S in World

瀬人 LP1100／手札3枚／伏せ2枚

ドル・ドラ／守1000

「まさか——。記憶をつ、取り戻したというの？ そんなことが……」

戸惑いを隠しきれないキサラの言葉に、瀬人は自嘲気味にフツつと笑う。

「さあな。そういう言い方が正しいかどうかは知らん。しかし——」

熱く拳を握りしめ、彼は再び宣言する。

「俺が胸に宿した想いに、偽りはないささかもない！ 今度こそ、お前を救う！ そして、共に歩む未来を、この手勝ち取つてみせる！」

「——私を、救う？ 共に歩む未来を、勝ち取る？」

キサラは、瀬人が宣言したことの要点を抜粋して、黒と蒼が混じった眼を丸くした。

「ふふふ……あつははは……」

続いて乾いた笑い声をあげる。無知で哀れな決闘者を、舞踏者を嘲笑う。そして仕方なく教えてやつた。

「貴方が出した答えは矛盾しているわ」

「どういうことだ？」

「このデュエルで貴方が勝てば、私は死ぬことになる。逆もまた然り。そんな私と共に歩む未来なんて、絶対に存在しな——」

「もし存在するとしたら、どうだ？」

その発問は、キサラの表情をリセットさせた。

「あのヴィジョンの、モーメントが暴走する未来には至るまい。何故なら、あの未来にお前の姿はなかつた！ お前を救い、共に歩むといふ第三の選択をすれば、罪と絶望に満ちた未来を変えることができる

はすだ！」

「……偉そうなこと言つて、貴方のフイールドは、口ほどにもないじやない」

彼女は理想論を避け、現実を指摘した。

「貴方を守つているのは2枚のリバースカードと、死に損ないの雑魚ドラゴンが一匹だけ。対する私の場には『青眼の究極竜』がいる」

それに同意するように、攻撃力4500の究極竜が低く吠えて瀬人を威嚇する。

「さうに――私の墓地に眠る『スキル・サクセサー』は、自身を墓地から除外することにより、モンスター1体の攻撃力を800ポイント上昇させる効果を、自分のターン限定で発動できる!」

「と、いうことは――」

先程キサラが披露したブルーアイズ召喚コンボを思い出すことで、瀬人は気づいた。

「そう。『青き眼の乙女』の効果でブルーアイズを特殊召喚すれば、さらなる追撃も可能！　このターンで、今度こそ終わらせてあげる！　私のターン!!」

キサラにはドローカード以外に手札がない。しかし彼女は、それを一瞥して嗜虐的な笑みを浮かべた。

『青き眼の乙女』を守備表示に変更し、バトルフェイズに入るわ！  
『青眼の究極竜』で攻撃！』

白い指が瀬人のほうに向く。攻撃目標を定めた究極竜の3つの口腔で、エネルギーが充填されていく。

「喰らいなさい！　アルティメット・バーストオ!!」

全てを滅ぼす光の砲撃が放たれ、『ドル・ドラ』を呑み込まんとする。

しかし、瀬人の顔に恐怖の二文字はない。

「リバースカード、発動！」

対するキサラもまた、驚愕の二文字を現しはしない。

「言つておくけれど、並みのカードならば無意味よ！」

「並みのカードなどではない。俺自身が信じた最強の竜。それを迎え撃つなら、最強トラップのひとつを使わざるをえまい！」

勇ましき決闘者の足下でカードのイラストが、キサラからも見える  
ように反転する。それは、全てを跳ね返す無敵の光壁——。

「喰らえッ！『聖なるバリア—ミラーフォース』！ 相手の攻撃表示  
モンスターを全滅させる!!」

「なつ!?」

今度こそは、キサラを驚愕させるに至った。『ミラーフォース』は、  
彼女の計算を狂わせるのに十分なカードだつたのだ。

「そして俺は信じている！ ブルーアイズの強さは『ミラーフォース』  
1枚で破られるものではないと！」

光の奔流は『ミラーフォース』で反射され、光の矢となつてキサラ  
の方へ翔んでいく。

「さあ、どう避ける!?」

キサラは眉間に皺を寄せながら……。

「貴方に心配されるまでもない！ 手札から速攻魔法発動！ 『融合解  
除』!! 『青眼の究極竜』の融合を解除し——」

すると究極竜が輝き、その光の中に三つの影が見えた。

「3体の『青眼の白龍』を、守備表示で蘇生召喚！」

青眼の究極竜／攻4500（EXデッキへ）

←

青眼の白龍／守2500×3

光が止むと、影は白き龍の姿を現す。姿勢を低くしているのは守備  
表示の証だ。龍と乙女に迫つていた光の矢は、その頭上を空しく通過  
する。

「これで、私の場に攻撃表示モンスターはおらず、『ミラーフォース』に  
よる被害はゼロ！ 残念だつたわね」

「残念だつたのはお前のほうだろう？」

同じ得意げな笑みであつても、キサラは止まり、瀬人は深まつた。  
「俺の伏せカードが『次元幽閉』のような対象を取る効果のカードだつ  
たなら、今のターンでトドメを刺せたはず——それができなかつた。  
お前の想像を超え、究極竜を退けさせた俺に、流れは向いている！」  
「減らす口を！ 究極竜ではなく、3体のブルーアイズなら勝てるど

でも!?

キサラは嘗められたことに怒りを露にするが——何かに気づき、吸血鬼のような笑みを浮かべ始める。

「——いや、貴方が相手をするのは、3体のブルーアイズ以上の布陣よ！」

白い右手が天に掲げられる。まるで、何かの儀式を行うかのように。

「バトルフェイズを終了し、メインフェイズ！ レベル8の『青眼の白龍』に、レベル1のチューナーモンスター『青き眼の乙女』をチューニング!!」

「なにッ!?」

空へ翔んだ白龍と乙女は、テクスチャー前のような光の骨格に姿を変える。その後、龍は8つの光球、乙女は光輪1つのみを残して、完全に霧散した。

「進化の光と古の威光——いま交わりて、守護の光となる！ 蒼天を臨む銀嶺が如く、此処にそびえ立て！」

☆8+☆1=☆9

集いし9つの輝きは、やがて光の柱となつて空を貫く。その中に、巨龍の影が映る。

「シンクロ召喚！ 君臨せよ、『蒼眼の銀龍』!!」

蒼眼の銀龍／守3000

最初に見えたのは、蒼く発光する眼だつた。ブルーアイズよりも小さい眼が、射抜くような光線を放つてゐる。四肢には、その巨体を支えられる強靭な筋肉が晒されている。鱗を纏わずとも、十分な防御力があるということだろう。『蒼眼の銀龍』は『青眼の白龍』とはまた異なる、逞しい美しさと強さを持つ龍であつた。

瀬人は滅びのヴィジョンを観た際に、シンクロの概念は知ることができた。しかし実物を見たのは初めてである。

「シンクロ召喚!? これが——未来の召喚方法か!」

「そう。人類の進化とモーメントを加速させ、最後には滅びを招いた召喚方法よ！ そして『蒼眼の銀龍』の効果発動、ホワイト・フレア・

サンクチュアリ!!』

すると『蒼眼の銀龍』が踏みしめた所から、白い霧のようなものが立ち込め始める。それは残る2体の『青眼の白龍』の足下まで広がった。

「この効果は『蒼眼の銀龍』が特殊召喚に成功した時に発動し、その後2回目のエンドフェイズを迎えるまで続く! この聖域の加護を受けている限り、私が従えるドラゴンはカード効果の対象にならず、カード効果による破壊も通用しない!」

「次の俺のターンに、カード効果で対処するのは困難だということか……!」

瀬人の手札には、強力な魔法カードが1枚ある。しかしそれは『対象を選択する効果』のカードだった。故に、聖域に阻まれて効果を発揮できない。

「それだけじゃないわ!『蒼眼の銀龍』にはもう1つ効果がある! その名は銀龍の咆哮! スタンバイフェイズが訪れる度に、私の墓地の通常モンスターを、つまり『青眼の白龍』すら蘇生させることができる!」

つまり、瀬人がこのまま何もしなければ――。

「次のターン、3体のブルーアイズに『蒼眼の銀龍』を加えた巨龍の軍勢が、貴方に総攻撃をかける! 今度こそ終わりよ、セト!!」

鬼の形相でキサラは瀬人を睨む。3体の龍も同様に、柵を破らんとする猛獸のように激しく吼えたてる。対する瀬人の場では、『ドル・ドラ』が守備表示で平伏すのみ。

「私のターンは終了よ。さあ――今度こそ殺してあげる。罪と絶望を生む前に、積み重ねる前に!!」

キサラ LP3900／手札0枚／伏せ1枚

青眼の白龍／守2500

蒼眼の銀龍／守3000

魂吸収

S in W o r l d

瀬人 LP1100／手札3枚／伏せ1枚

ドル・ドラ／守1000

「俺の、ターン……」

額に汗を浮かべながら、瀬人は恐る恐るデッキに手を伸ばす。キサラが歪んだ美貌と笑みでそれを見つめていることが、彼にはわかつた。

（このターンで『あのカード』を引けなければ……俺は確実に負ける！）

『蒼眼の銀龍』を従えたことで勝利を確信しているキサラと違い、瀬人はデッキに可能性が残されていることに気づいていた。

だからこそ、信じるのが怖い。裏切られるのが怖い。

（どう龜頭目に見ても、『最強』と名乗れはしないこのデッキを……俺は心から信じられるのか？　俺が、俺が今まで信じてきた、数少ないものは――）

そこまで自問自答をして、瀬人はハッと気がついた。

（――何を、恐れる必要があつたのだろうな……）

瀬人の表情は穏やかに、微笑すら浮かべるようになり、落ち着いた様子でデッキに手を伸ばしていく。その変化に、キサラは当然気づいている。

「どうしたの？　追い詰められすぎて、頭がおかしくなつたのかしら？」

「まさか。――信じているだけさ」「信じる？」

瀬人の手がデッキに触れる。彼はドローする前に、この一枚に託した想いを熱く語つた。千載一遇の機を前にした勝負師のように。

「そう――。キサラ、あるいはブルーアイズ！　お前は、闇に墮ちようと、傷つこうと、決して俺を裏切ることはない！」

だからこそ俺は、必ずお前を闇から救い出す！　そして二度と傷つけあうこともなく、底い合うこともなく、未来へのロードを共に歩む！　このターン、このドローは、その礎に足を掛けるための、第一歩であり、ラストチャンス！」

剣客が鞘から抜刀するように、気高き決闘者は風を切り光が差すほどの勢いで、運命のカードを引き払う――！

「行くぞ。俺の……タアアーン!!」

その見事なドローに、揺るぎない心に――彼のデッキは、応えてくれた。

「キサラ。お前の心のピーズがひとつ、いま救い出してやる！　俺が引いたカードは――」

二人の、再会のデュエルで使われたカードの1つ。決闘者の王に引導を渡す鍵となつたカードの1つ。

今まで多くの物語を紡いできた魔法。そして今、瀬人とキサラを繋ぐ魔法――。

『死者蘇生』!!

「な……なんですって!?」

キサラのデュエルディスクから、一枚のカードが瀬人の元へ舞い込んでくる。彼はそれを、慣れた手つきでフィールドに出した。

数多の決闘で繰り返してきた、今までの彼にとつて当たり前だった動作――。

「蘇れ！　俺が最も信じ、愛するカードよ！　俺と志を同じとするならば、今一度、俺に力を貸せ!!」

紫色の銀河が、太陽の如き聖なる暖かい輝きで照らされた。

否、そのカードは、彼にとつて紛れもない『太陽』だつた。

彼に力を与える光。彼を見守る光。彼の征くロードを示す光――。

「ブルーアイズッ！　ホワイト・ドラゴンッ！」

青眼の白龍／攻3000（キサラの墓地→瀬人の場）

光の中から現れた白き龍は、この7ターンの中で最も力強い咆哮を上げた。

相手フィールドの三龍を前にして、恐れなど一片もない。

それを従える誇り高き決闘者も、その心は同じだ。

「ふうん。俺はさうにカードを一枚伏せ、ターンエンド！

さあ、来るなら来い！　俺とブルーアイズが共にある限り、敗北の二文字などない!!」

普段の力強さ、自信、誇り——全てを取り戻した瀬人を前に、彼女は身体を震わせ、黒の混じつた銀髪を振り乱して怒り狂つた。

「かえせ……。そのカードを……かえせえエエツ!!」

7ターン目にして、決闘は様相を変えた。

もはや、白き龍が裁きを以て瀬人を救うデュエルではなくなつた。これは、白き龍を従える2人の決闘者のデュエル——！

キサラ LP3900／手札0枚／伏せ1枚

青眼の白龍／守2500

青眼の白龍／守2500

蒼眼の銀龍／守3000

青眼の白龍／守2500

S in W orld

瀬人 LP1100／手札2枚／伏せ2枚

青眼の白龍／攻3000

ドル・ドラ／守1000

魂吸収

## TURN 8—9 『青眼の究極竜』

キサラ LP3900／手札0枚／伏せ1枚

青眼の白龍／守2500

青眼の白龍／守2500

蒼眼の銀龍／守3000

魂吸収

SinWorld

瀬人LP1100／手札2枚／伏せ2枚

青眼の白龍／攻3000

ドル・ドラ／守1000

「ふうん。アテが外れたな、キサラ」

自分のターンを終えた瀬人は、2本先取の勝負で1本取ったかのように、余裕の笑みすら浮かべていた。

「これで次のターン、お前は3体のブルーアイズで攻撃することなど不可能だ。

そして『蒼眼の銀龍』の効果、ホワイト・フレア・サンクチュアリもこれで終了。やつと互角の闘いが出来そうだ」

3体のドラゴンを守っていた白い霧が晴れていく。

「互角？ 互角ですって……？」

しかし罪に堕ちた決闘者の表情は、負の感情によつて曇る。

「今さらブルーアイズを従えればどうにかなるとでも!? 私のフィールドには、同じ『青眼の白龍』が2体! さらに墓地には『スキル・サクセサー』がある!」

キサラが意地を張つて示したもの。それは、前のターンから進展していない現状だった。対する瀬人のフィールドには、新しく『青眼の白龍』が堂々と存在を示す。

「ふうん。誰が何と言おうと、俺とブルーアイズが創るのは、光輝く未来へのロード! あとはキサラ。お前を救い、共にそのロードを駆けるだけだ」

「戯れ言を! 貴方がそう言うなら——ブルーアイズの力で、貴方を

滅ぼすまで！ 私のターン!!」

ドローカードを確認すると、彼女は悔しそうな舌打ちを洩らした。

「2体の『青眼の白龍』を攻撃表示に変更し、バトルフェイズ！」

青眼の白龍×2／守2500／攻3000

「たとえ『ドル・ドラ』を見逃すことになろうとも——ブルーアイズは残さない！」

鏡の虚像と実像のように、2体のブルーアイズが東西に対峙する。相討ち狙いの攻勢である。

「ゆけ、『青眼の白龍』！ 滅びのバーストストリーム!!」

黒と蒼が混じった瞳を見開いたキサラの背で、巨龍の口腔が光輝く。

「アツハハハ！ 期待が外れたわね、瀬人！ 貴方と違つて、私は『青眼の白龍』を散らせることに躊躇いなんてないの。私もブルーアイズも、罪深い存在だから！ それに『スキル・サクセサー』を使えば、一方的に戦闘に勝つことも可能なよ！」

「——まだ気付かないか」

攻撃する前の高ぶりを語るキサラに対し、瀬人は静かに咳く。それでやつと彼女は違和感を覚えた。

「こ、攻撃が始まらない……？」

充填された『爆裂疾風弾』は、サーチライトのように瀬人の側に光を当てるが、それ自体は一向に発射される気配がない。

瀬人が白く見えるほど照らされたフィールドでは、1枚の罠カードがリバースしていた。

「俺は罠カード『和睦の使者』を発動させてもらつた！ これでお前のモンスターは、俺に戦闘ダメージを与えることも、戦闘による破壊を行うことも出来ない！」

だが——俺の『青眼の白龍』には何の影響もない！」

瀬人が操る龍の砲門が開く。2つの疾風弾から零れる幾条の光が、剣閃のように交錯する。

「キサラ！ このままではお前の『青眼の白龍』が戦闘破壊されることになるぞ！ 早く選ぶがいい！ 『スキル・サクセサー』を使うか、否

か！」

「ふざけた真似を！ 私に裁かれるべき貴方が、私に選択を迫るというの!?」

「お前に何と言われようと、俺のブルーアイズが止まることはない！」  
彼女が苛立ちを見せている間にも、運命の瞬間は迫り——とうとう弾けた。

「いくぞ——滅びの爆裂疾風弾!!」

限界まで引き絞られた弦から放たれる一撃。それを前にして、「わ、私は……『スキル・サクセサー』を——」

彼女はこのデュエルにおいて、初めて戸惑いの表情を見せる。

しかし、何かを悟ったかのように——緊張の糸が切れたののように——

——淡い笑みを浮かべると、ポツンと呟いた。

「——使わない。使わないわ」

キサラの背で、2つの爆裂疾風弾が衝突した。

太陽が生まれたような閃光は、双龍を消し去る威力を持つていたはずだったが、片方を葬るに留まつた。

青眼の白龍／攻30000（戦闘破壊）

《VS》

青眼の白龍／攻30000（和睦の使者）

瀬人は空のように青い眼で全てを見ていた。その上で揺るぎない視線を彼女に送っている。

送られた以上は返さねばということか、爆音が止んだ一瞬の静寂の後、罪に堕ちた決闘者が口を開く。

「フフ。だつて、次のターンには『蒼眼の銀龍』の効果で蘇生できるのよ？ だつたら、犠牲にしたつていいじゃない」

「甘いな」

聞きようによつては弁明とも取れるそれを、瀬人は一言で吐き捨てた。

「俺なら間違ひなく『スキル・サクセサー』を使つていた！ ブルーアイズを守れるなら、罠カードの1枚や2枚など惜しむものか！ そんな計算で、そんな心で——ブルーアイズを従えて俺を倒すだと？ 甘

い!!

「フン、甘いのは貴方のほうよ！『青眼の白龍』も海馬瀬人も、そんな価値を持つてはいない！ 罪を背負い、償いの名の下に散るより上の価値など——ありはしない!!」

『青眼の白龍』の在り方と価値を巡り、デュエルに劣らぬほど激しく想いをぶつけ合う。だが、手を伸ばしても届かない距離での決闘と論争では、魂の交差する場所に2人が導かれることはない。

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

2つの平行線を繋ぐ一筋の光は、何処にあるのだろうか——。

キサラ LP 3900／手札0枚／伏せ2枚

青眼の白龍／攻3000

蒼眼の銀龍／守3000

「俺のターン、ドロー!!」

先のターンと違い、瀬人のドローに迷いはなかつた。何故なら——。

「キサラ！ このターンで、俺とブルーアイズが持ちうる可能性、創りゆく未来の片鱗を、お前に見せてやる!!」

光は既に——彼の手にあつたからだ。

「馬鹿なことを。貴方がどれだけ口上を並べようと、攻撃力3000の『青眼の白龍』では、守備力3000の『蒼眼の銀龍』を突破出来ない！」

「ふうん。お見通しというわけか……」

瀬人は穏やかな笑みを浮かべてキサラの意見を肯定する。

「さすがだと言いたいが……」

彼の評価が一線を越えることはなかつた。なぜなら、海馬瀬人のデュエルは——。

「甘いぞキサラ！」

彼女の1歩先を行く——！

「リバースカードオーブン！」

『エネミーコントローラー』!!

「なに!?」

十字キーと3つのボタンを持つそれは、紛れもなくコントローラーだが、操作対象は勇者でも配管工でもない。

「このカードはコマンド入力することで、お前のフィールドのモンスターを操ることができる！」

『ドル・ドラ』を発動コストの生贊にして、↑、↓、A、B！コマンド入力が終わると、ケーブルが対象となるモンスター、『青眼の白龍』に接続された。

「このコマンドによつて、お前フィールドの『青眼の白龍』は、俺の生贊として使用することができる！」

「いけ、にえ……！」

本来『エネミーコントローラー』で奪取した相手モンスターは、1ターンのみ、攻守を含めて手足のように操れるのだ。

しかし、瀬人は敢えて『生贊』という言葉を使つた。

「馬鹿な！ 貴方がブルーアイズを生贊に捧げてまで喚ぶモンスターなど、いるはずが……」

「これがお前の――疑問に対する答えだ！」

『融合呪印生物――光』を通常召喚!!

融合呪印生物――光／攻1000

宝石や機械、生物の肉体を混ぜ合わせてカプセルに凝縮したような、奇怪な生命体が現れた。だがそれは、すぐさま眩い光に包まれて見えなくなつた。

「融合呪印生物よ！ いま最もふさわしい姿に、その身を変えよ!!」

卵から天使が孵るように、光の球体から白翼が広がる。

その後も成長を続け、仮染めの生命は美しさと誇りを宿した龍に生まれ変わる。

海のように澄みわたる美しい青眼、穢れを知らぬ誇り高き白銀――。

「青眼の白龍！」

「融合呪印生物が持つ第一の効果だ！ このカードは、融合モンスターに記された融合素材の代用品にできる！」

最もこれは本来、姿形をコピーする能力ではない。それにもかかわ

らず『青眼の白龍』の身体を得たのは、すぐに『融合素材』としての役目を果たすからに他ならない。

「そして、第一の効果を発動！　自身を含む融合素材モンスターを生贊に捧げることで——融合モンスターを特殊召喚する!!」

「まつ、まさか——!?」

「俺は、3体のブルーアイズを生贊に捧げる!!」

対象となりうる組み合わせなど、瀬人のフィールドを見る限り、1つしかない！

天空へ舞い上がるブルーアイズ達の交差点。そこから生まれた光が、月明かりのように瀬人へと降り注ぐ。

「強靭・無敵・最強たる竜よ！　今ここに具現し、未来へのロードとともに、真のブルーアイズの所有者を示せ！」

淡い青さを帯びた輝きは、三つ首龍の輪郭を描き始める。幻想かと疑てしまいそうな、儂いヴィジョン。

だが夢や希望など、初めはそんなものだろう。

それをカタチにするのが、知恵であり、力であり、勇気。今の瀬人には——全て揃っている！

「非正規手段による——特殊召喚！」

絵画が完成するように、写真が色づくように、龍の輪郭に命が宿つた。未来を切り拓く、究極の力——。

「ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン!!」

青眼の白龍×2（生贊）  
融合呪印生物——光（生贊）

←

青眼の究極竜／攻4500

「そ、そんな……。『青眼の白龍』が1枚も入つていかないデッキから『青眼の究極竜』を召喚した……？」

「キサラ！　これが俺の答え——第3の選択肢だ！　お前との闘いは、殺すか殺されるかの二択ではない！　共に歩み、未来を創ることも出来る！」

「ば、ばかな……。こんな、ことが……！」

驚きのあまり呆然としていた彼女が、神に平伏す民のように、或いはオアシスを前にした放浪者のように片膝をつく。

だが、その眼が未だ闇を拭えていないことから、瀬人は決意した。「許せよ、蒼眼の銀龍……。バトルフェイズ！『青眼の究極竜』で『蒼眼の銀龍』を攻撃！」

短く小さな声で守護龍に詫びると、瀬人は躊躇いもなく、究極の一撃を解き放つことを宣言する。その砲撃の名は――。

「究極爆裂疾風——アルティメット・バーストオ!!」

高速で暗闇の出口に迫った時のような、すさまじい光量――。果てなき紫の銀河が書き換えられて生まれたまっしろな世界に、『蒼眼の銀龍』が溶けて消えていく……。

青眼の究極竜／攻4500

《VS》

蒼眼の銀龍／守3000（破壊）

「ぐ、あ、ああ……！」

キサラもまた、究極竜が放つた風と光に一瞬で覆われ、白く染まっていく。黒く汚れた雪が川の流れを受ける姿のように、罪に墮ちた決闘者の髪と身体がなびいて震えた。そして遂に、「きやあああッ！」

と悲鳴を上げてキサラは吹き飛ばされた。

「カードを1枚伏せる。そして最後の手札、『超再生能力』を発動！」

『超再生能力』は、このターンに手札から捨てた、もしくは生贊にしたドラゴン族モンスター1体につきカードを1枚ドローする魔法カードである。1ターン目にキサラも使用している。

「俺はこのターンに、『ドル・ドラ』と『青眼の白龍』2体——合計3体のドラゴンを生贊として使用した！ よってデッキから3枚のカードをドローする！ これでターンエンドだ！」

キサラLP3900／手札0枚／伏せ2枚

モンスターなし

魂吸収

S in W orld

瀬人LP1100／手札3枚／伏せ1枚

青眼の究極竜／攻4500

「目を覚ませ、キサラ！これでわかつただろう!?俺たちは互いに傷つけ合う必要も、庇い合う必要もない！2人で共に歩み、未来を創つていけるんだ！だから——刃（カード）を捨てろ！そして俺の元へ来い！キサラ!!」

『青眼の究極竜』によつて照らされながら、瀬人は今までにはないほど強く、彼女の心に訴えかける。

すると彼女は、足腰を震わせながら、カードを握りしめながら立ち上がつた。その表情は、ロングヘアの銀色に隠されて見えない。しかし――。

「今さら、出来もしないことを……。言わないで、下さいよ……」  
聞き逃しそうな程小さな声と、今までとは違う立ち方から、瀬人は感じ取つた。

最初の彼女は、女帝のような自信を土台にして立つていた。

その後、瀬人が『青眼の白龍』を取り戻した時からは、怒りに燃える悪鬼のようであつた。

だが今の彼女は、悲劇を唄う歌姫のように、必死で、か弱さを感じられるようである……。

（顔が見えずとも……。俺にはわかる。そして、あくまでカードで語るというなら——俺は、どこまでも付き合つてやる！この魂を賭して、キサラの全てを受け止める!!）

キサラの、彼女の心が——泣いていることを――。

# TURN10—11 『終わりの始まり』

キサラ LP3900／手札0枚／伏せ2枚

モンスターなし

魂吸收

SinWorld

瀬人 LP1100／手札3枚／伏せ1枚

青眼の究極竜／攻4500

キサラが銀と黒のグラデーションを描く髪を振り払い、顔を露にする。

やはり涙は流れていない。蒼と黒で混沌とした瞳の色合いも相変わらずだ。しかし視線が違う。見下すような断罪者の視線でも、睨みを利かせた鬼の視線でもない。瀬人と同じ——真剣な、生きている人間の視線だ。

「私のターン！」

そのままドローするのかと思いきや、彼女はピタリと手を止めて一呼吸置く。そして決断した。

「私は……ターン開始時のドローを放棄することで、『SinWorld』の効果を発動します！ デッキからSinモンスターを3枚選び、その中からランダムに貴方が選んだ1枚を手札に加えます！」  
「ふうん。どうどう、あからさまなコンボに頼らざるを得ないほど追い詰められたか？」

「あからさま？ そんな評価をしていられるのも今のうちです！ 私のエースモンスターは、確実に究極竜を粉碎します！」

キサラがそう宣言しながら提示したのは、次の3枚のカードだった。

『Sinスター・ダスト・ドラゴン

『Sin・パラレルギア

『Sin・パラレルギア

(2体は攻撃力0のチューナー、1体は攻撃力2500のSinモン

スターか……）

情報の1つとて逃さない、鋭い瀬人の視線が止んだのを見計らつて、キサラはイラストを伏せてシャツフルした。

「真ん中のカードを手札に加え、残りはデッキに戻してもらおうか」  
フツと軽い笑みを浮かべて、彼女は一連の処理を済ます。準備は整つてしまつたのである。

「トラップ発動！『リビングデッドの呼び声』！」

瀬人も使用している、万能蘇生カードの1つである。しかし攻撃表示でしか蘇生出来ず、低攻撃力モンスターを呼び戻しても壁にはならない。

「む？ 究極竜を超える蘇生可能なモンスターなど、いないはずだが……」

「勘違いしてもらつては困りますね。私が蘇生させるモンスターは――序盤で墓地に落とした、『S·in·パラレルギア』！」

先ほど見たチューナーの、言うなれば1枚目が対象として選択される。キサラが何をするつもりか、瀬人には手に取るようにわかつた。「くつ……そのトラップに対し、手札の『増殖するG』の効果をチーン発動！ このカードを手札から捨て、その後相手が特殊召喚を行う度に、デッキからカードを1枚ドローする！」

「貴方が何をしようとも……私はもう止まれない……止まるわけにはいかないんですよ……！『S·in·パラレルギア』を蘇生召喚!!」

瀬人手札3枚→2枚→3枚

S·in·パラレルギア／攻0（墓地→場）

3本のネジを地に向けて伸ばす奇怪な歯車が現れる。続いて非チューナーのモンスターが召喚されると思われたが――。

『S·in·パラレルギア』の制約効果！ このカードをシンクロ素材とする場合、もう1体の素材として手札のS·inモンスターを使用する！

レベル2の『S·in·パラレルギア』に、手札に存在する、レベル8の『S·in·スター・ダスト・ドラゴン』をチューニング!!』  
「なに、手札からシンクロ召喚だと！」

フィールドに細身な龍の骨格が浮かび上がり、そこに2つの黒い輪が重なった。

☆2+☆8=☆10

「歴史の陰から生まれし悲しみよ！ 時空を超えた物語に、終焉のピリオドを打て！」

シンクロ召喚！『Sinパラドクス・ドラゴン』!!

Sinパラドクス・ドラゴン／攻4000

現れたのは、瀬人の視界を覆うほどの黒翼を広げた獰猛な龍——Sinパラドクス・ドラゴンだった。

「Sinパラドクス・ドラゴンの効果発動！ このカードがシンクロ召喚に成功した時、墓地のシンクロモンスター1体を復活させます！」

蘇れ、『蒼眼の銀龍』！

蒼眼の銀龍／攻2500

『Sinパラドクス・ドラゴン』の隣に新たな龍が降り立つ。これにより、神に匹敵する要塞を造るコンボが組み上がった。

「そして、

チエーン1に『蒼眼の銀龍』の効果を、

チエーン2に『スキル・サクセサー』の効果を墓地から発動！

『Sinパラドクス・ドラゴン』は攻撃力が4800まで上昇し、さらにホワイト・フレア・サンクチュアリの加護を受けます！」

Sinパラドクス・ドラゴン／攻4000→4800

強力な耐性と高い攻撃力を得た『Sinパラドクス・ドラゴン』は宙へ飛び立ち、獄炎のような赤い眼で瀬人と『青眼の究極竜』を見下ろす。

「さきにリバースマジック『終わりの始まり』を発動！

いま私の墓地には、6体のSinモンスターと『ダーク・アームド・ドラゴン』——合計7体の闇属性モンスターがいます！

この内、5体のSinモンスターを除外し、カードを3枚ドロー！」

墓地→除外

『Sin真紅眼の黒竜

『Sinレインボー・ドラゴン

『S·in青眼の白龍』

『S·inバラレルギア』

『S·inスター・ダスト・ドラゴン』

キサラは3枚ものカードをドローした上に、まだ通常召喚をしていない。しかし彼女は手札を見つめるばかりで、召喚もカードの発動もしなかつた。

「ふうん、どうしたキサラ。満足のいくカードは引けなかつたか？」

実を言えば図星であつたが、あくまでキサラは氣丈に振る舞う。

「引く必要もありませんよ。『スキル・サクセサー』と5体のS·inカードが除外されたことで『魂吸収』の効果が発動し、私のライフは3000ポイント回復します！」

キサラLP3900→6900

「しかも私の場には、神に匹敵する『S·inバラードクス・ドラゴン』があります！　2体のドラゴンの攻撃で――このデュエルは、終わりです！」

「そうだな。もう、終わりだな……」

瀬人が圧倒的な物量差を前に諦め、うつむきながらキサラの言葉を肯定した……少なくとも彼女の目にはそう映つた。あとは、トドメを刺すだけ――。

『バトルフェイズ！』『S·inバラードクス・ドラゴン』で『青眼の究極竜』を攻撃！

逆刹の革新戦火砲ツッ！

（逆刹のパラダイムシフト・ブレイズ!!）

砲門のように最小限の開き方をした口から、暗黒の火炎が放たれる。

それに対しても彼と彼の竜は、何も出来なかつた。

――いや、何もしなかつたのだ。

「キサラ――気づいていたか？　お前の口調が、元に戻り始めていることに！」

一瞬の、勝機が訪れるまで……！

「このデュエルは……こんなデュエルは、もう終わりだ！　お前が抱

く罪の力が、が神に匹敵するというのなら！　俺とお前の絆は、神をも超える!!』

『青眼の究極竜』の全身が、降り注ぐ昏い業火に包まれたこの瞬間——つまり『ダメージ計算時』こそ、瀬人の想いと策が煌めく時なのだ！

「リバースカードオーブン！『ハーフ・カウンター』！」

暗雲のような炎を払つて姿を見せた『青眼の究極竜』は、その身に紫電を纏い『S·i·n·パラドクス・ドラゴン』と同じ高さまで飛び上った。

「このカードの効果で、『S·i·n·パラドクス・ドラゴン』の元々の攻撃力の半分を、究極竜の攻撃力に加える！　よつて、究極竜の攻撃力は——」

青眼の究極竜／攻4500→6500

「こつ、攻撃力——6500?！」

「この一撃で、お前の目を覚ましてやる！　いくぞ！

反撃の——アルティメット・バースト!!」

三つ首のそれぞれが、強化された光弾を解き放つ。『S·i·n·パラドクス・ドラゴン』の右翼に風穴を開け、左翼を剥ぎ、黒い首を断つてなお余力ある爆裂疾風は——銀色の風となつて、キサラを包む。

青眼の究極竜／攻6500

『V.S』

S·i·n·パラドクス・ドラゴン／攻4800（破壊）

（……超えて、くる……）

つよいつよい光の中で、彼女は悟り始めていた。

（この人は、セト様は……。自身の、私の——罪も、絶望も、悲しみも——受け止め、超えてくる）

S·i·n·青眼の白龍、青眼の究極竜、蒼眼の銀龍、S·i·n·パラドクス・ドラゴン。彼女の罪を具現化した存在たちを、瀬人は超えてみせた——ブルーアイズと共に。

（私にこの人は、殺せない。この人は私を、殺さない）

二択と思われた選択肢。その両方が無為にして不可能であるとい

うのなら。

(私が、為すべきことは——)

彼女がそこまでを、真っ白にした頭で考えたところで、か細い体は清流に流されるよう宙へ飛んだ……。

キサラ LP 6900→5200

「キサラ!!」

彼女の身体が地に着いて間もなく、瀬人はそこに駆け寄った。髪はもとの清く白い輝きを取り戻していた。眼は閉じていたが、黒い涙の紋様は跡形もなく消えていた。

抱き起こしてみれば、彼女は目を閉じたまま、か細い声で呟いた。「セ、ト……さま……」

「キサラ！ 元に——元に戻ったんだな！」

二人の心と力が、未来を拓いた！ 瀬人は柄にもなく嬉しそうな笑みを浮かべる。

そしてキサラは——。

「に……。に、げ……て……つ」

熱でうなされているかのように息を乱れさせながら、必死で瀬人に伝えた。

「キサラ……。もう、俺は逃げない！ 罪からも、過去からも！ 今度こそ共に歩もう。二人で、未来を創り、拓こう。俺には、お前が——「ち、がう……。ちがう、の……つ！」

瀬人の否定よりも更に強く、キサラは彼を言葉で突き放す。

「もう……私を、死なせ、て……。でない、と……」

二択の中で苦しむ彼女の眼は——。

「私は、あなた、を……。

殺す、こと、に……つ」

黄と黒と青。毒物をかき混ぜたような色で濁っていた。

「うつ……！ ああッ！」

「——キサラ……？」

キサラを中心に、地面にブラックホールのような渦が生まれ、彼女

のライフが桁たましい音を立てながら削っていく。

そして――。

「ああああアアアアアアア――ツツ!!」

「ガツ……!?」

キサラ LP 5200→2600

瀬人の身体が突如跳ね飛ばされる。キサラの下と内から溢れだした銅色の影によつて。

銅色の影は紫の銀河とキサラの肉体を侵しながら膨らんでいき、生命の形を成していく。視界を覆つて突き付けられる、鋭い翼。

人の世の、罪と真実を嘲笑う巨大な口腔。

その竜の名は――『Sinトゥルース・ドラゴン／攻5000（墓地→場）メットを見下しながら、その全貌を現した……。

Sinトゥルース・ドラゴン／攻5000（墓地→場）

「――よくも、よくもここまで私を追い詰めたものだな……。瀬人！」

その声はキサラの口から発せられたが、キサラのものではない声だった。

声の主は、キサラという蛹から脱皮した成虫のように身体を起こして現れ、瀬人を睨みつけた。

「だが……それもここまでだ！ 貴様は、この私自らの手で抹殺してやる……！」

金の長髪と、目元に血涙の痕のような刺青を持つその男を見て、瀬人は直感で確信した。

「貴様か！ キサラを惑わし、こんなツラいデュエルを仕掛けたのは！ 貴様は何者だ!?」

「私は、イリアステルの滅四星が1人、『逆剣のパラドックス』！ 時空を超え、最善の歴史を探し求める者。このデュエルも、私が求める未来へ至るための一過程にすぎない！」

「いち、過程、だと……！」

そこからパラドックスが話したことは、すでに瀬人も知っていたことだつた。

モーメントの開発によつて、より一層の進化と発展を遂げた世界。

だが欲望や誘惑も同時に増長され、その世界は自滅に至つた……。  
「その未来を回避するために、多くの実験を試した……。だがいずれも失敗した。

特に前回の実験では、『S·i·n·W·o·r·l·d』の効果による死を覚悟した……

「まさか、その自業自得に——キサラを巻き込んだのか！」

パラドックスはニヤリと表情を歪め、我が物顔で彼女の白い首に腕を回す。キサラには抵抗する気力もないようで、苦しげに震えながら声を漏らすのみ。

「巻き込んだ、という言い方は心外だな。

私と融合して生き延びたことにより、キサラは悲願を叶える機会を得たのだ」

まあ、その見返りとして『キサラ』という元人間だった肉体を、我が魂の依り代として利用させてもらつてているのは事実だが——とパラドックスが追加で暴露したものだから、瀬人が声を荒げるのも当然だろう。

「今の俺とキサラにとつて、貴様の存在など邪魔だけだ。さっさと消え失せろ！」

「それは、出来ない相談だな——。

今私の私とキサラと『S·i·n·T·o·u·r·l·e·s··D·r·a·g·o·n』は——三位一体なのだから

パラドックスを殺すか、『S·i·n·T·o·u·r·l·e·s··D·r·a·g·o·n』を破壊すれば、キサラも死ぬ。

キサラの救済はパラドックスの勝利と同じ。

「選択肢は2つだ、瀬人。私とキサラが死ぬか、お前が死ぬか——。どちらにせよ、『我らが』悲願は達せられる。貴様が死んだ場合は勿論のこと、キサラをデュエルで殺した貴様が、デュエルの発展に携わることなど、できるはずがないからなあ!!」

「くつ……！」

「私はこれでターンエンド。貴様の『青眼の究極竜』の攻撃力は4500に戻り、我が身『S·i·n·T·o·u·r·l·e·s··D·r·a·g·o·n』を下回る……」

青眼の究極竜／攻6500→4500

パラドックスLP2600／手札3枚／伏せなし

Sinトゥルース・ドラゴン／攻5000

蒼眼の銀龍／攻2500

魂吸收

SinWorld

パラドックスが言うことは当たっていた。それを認めた上でキサラを救うには——。

「俺は諦めんぞ、パラドックス！『Sinパラレルギア』の後、『Sinパラドックス・ドラゴン』——。

『蒼眼の銀龍』——。

『Sinトゥルース・ドラゴン』——。

これらが特殊召喚されたため、『増殖するG』の効果によりカードを3枚ドロー！

瀬人手札3枚→6枚

「そして俺のターン！」

創るしかないのだ、この手札7枚で。パラドックスを倒しつつキサラを救う道を。  
しかし——。

「フン、どうした瀬人。満足のいくカードは引けなかつたか？」  
「黙れ！」

それでも彼は進むしかなかつた。たとえ、自分の心を、彼女の身を、傷つけることになろうとも——！

「バトルフェイズ！『青眼の究極竜』で……！」

瀬人の視線の先では、下半身を『Sinトゥルース・ドラゴン』に埋められたキサラが、うつすらと目を開けていた。

「瀬人様……。ごめん……なさい……」

自分のせいで、瀬人の記憶に消えない傷が刻まれた。自分のせいで、瀬人がいま苦しんでいる。瀬人の自分のせいで、瀬人の未来が閉ざされようとしている。自分のせいで……。

そんな、彼女が抱く罪悪感を解つた上で、彼は突き進む。

「ツツ！ 攻撃！ アルティメット・バースト！」

青眼の究極竜／攻4500

《VS》

蒼眼の銀龍／攻2500

キサラの写し身を以て写し身を討つ。その悲劇は、パラドックスとキサラのライフに大きなダメージを与えた。

パラドックス LP2600→600

「グフッ……！」

「かはつ……！」

パラドックスが血を吐けば、キサラもまた同じ量の血を吐く。

「キサラ！ くつ……！」

果たして、瀬人がこの三位一体を相手に選択する道は――。

「モンスターをセット！ カードを3枚伏せてターンエンドだ……！」

そして――。

「私のターン……！」

罪と真実の龍に跨がり、少女を抱えた逆剣が、最後の牙を剥ぐ――

！

瀬人 LP1100／手札3枚／伏せ3枚

青眼の究極竜／攻4500

???／裏側守備

パラドックス LP600／手札3枚→4枚／伏せなし

Sinトルース・ドラゴン／攻5000

魂吸収

SinWorld

# TURN12 『龍の鏡』

「私のターン……！」

瀬人LP1100／手札3枚／伏せ3枚

青眼の究極竜／攻4500

???／裏側守備

パラドックスLP600／手札3枚→4枚／伏せなし

Sinトルース・ドラゴン／攻5000

魂吸收

SinWorld

大袈裟にデッキから引き抜いたカードを、パラドックスはそのままプレイする。

「私は手札から『闇の誘惑』を発動！ デッキからカードを2枚ドローする」

ドローフェイズからの、更なるドロー。それは、パラドックスがほくそ笑むのに充分な引きだつた。

「その後手札から闇属性モンスター、『Sinサイバー・エンド・ドラゴン』を除外する。これにより、私のライフが『魂吸收』の効果で回復する」

パラドックスLP600→1100

一方、パラドックスと一体化させられているキサラは、『青眼の究極竜』の攻撃によって気絶したまだ。

(キサラ……)

何としても、今度こそキサラを救う。自身が定めた目的故に、瀬人の視線はやはり彼女へ向く。

「コレが気になるか？」

ボールでも持つような手振りで、パラドックスはキサラの頭を驚撃みにする。

「ゲスめ！ 薄汚い手で触れるな！」

「ふん、まあそう氣にするな。貴様らの糸はもうすぐ無に帰す。歴史の闇の中へとな……。お前たちの希望はここまでのようだ……」

パラドックスは、手札4枚の中から2枚に指を這わせた。

「手札から『モンタージュ・ドラゴン』を捨てることで『ハードアームドラゴン』を特殊召喚！ このカードは、手札からレベル8以上のモンスターを捨てることで特殊召喚できるのだ」

ハードアームドラゴン／攻1500

人体模型に対する龍体模型なるものがあれば、こんな見た目なのだろう。骨格と筋繊維で全身を覆つた二足歩行の龍が召喚された。（手札コストを払つてまで召喚した、攻撃力1500のモンスター……。シンクロ素材か？ 生贊要員か？）

瀬人の予想は、方向性としては正しい。だが――。

「これで今度こそ……勝利のキーカードが揃つた！」

私は、『ハードアームドラゴン』と――

規模を、見誤つていたのだ。

「我が身『Sinkトゥルース・ドラゴン』、『キサラ』を生贊に捧げる!!」「な……に……!?」

生贊と消滅を意味する風の渦。それが2人と2体を――何より、瀬人にとつて最愛の人を覆い隠す。

「や……やめろおおおおオオ――つ!!」

瀬人の叫びを他所に、彼女らの姿は霞んでいく。

「ハハハ……はははははは!!」

「あうつ……うわあああああ!!」

瀬人に続いて、キサラとパラドックスの声が、昏い空へと重なり響く。

「ちいッ！」

デュエルの捷を振り切つて、風を振り切つて瀬人は駆け出した。あと10メートル、5メートル……。

「キサラ!!」

地を蹴つて彼が伸ばした手は――宙を空しく掠めただけだった。

後に残されたのは、独りの男と黒く渦巻く空――。

そして暗闇から覗く紅い眼差し。

「な!?」

隕石が墜ちてきたのかと思う程の勢いで、その眼光は瀬人に激突し、その身体を小石のように弾き飛ばした。

凶太い腕に巨大斧を握り、冷たく紅い眼差しを向ける巨大な爬虫類の暴君——『タイラント・ネプチューン』だった。

「ククク……驚いたか？」

パラドックスの声が、頭に直接響く。

「これこそ、私が時空を超える旅と実験の中で手にしたカードの1つ……『タイラント・ネプチューン』だ。このカードは、召喚時にリリー<sup>ス</sup>したモンスター1体の能力をコピーする。これにより、三位一体の魂は維持された……」

コピーされたのは能力に留まらない。タイラント・ネプチューンの骨肉がミシミシと蠢き、再び『Sinトゥルース・ドラゴン』の巨翼が羽ばたいた。

「また、『ハードアームドラゴン』を生贊にして召喚された最上級モンスターは、カード効果で破壊されない！」

『Sinトゥルース・ドラゴン』の身体に、『ハードアームドラゴン』と同じ骨格状の硬い皮膚が浮かび上がった。もはやミラーフオースも激流葬も通用しない。

「さらに、『タイラント・ネプチューン』の攻撃力は、召喚時にリリースした自軍モンスターの攻撃力の合計値となる！」

タイラント・ネプチューン／攻1500+5000→6500

「攻撃力、6500の破壊耐性持ちだと!?」

「これだけでも貴様と『青眼の究極竜』を消し去るには十分。だが私は、さらに最後の手札——融合召喚カード、『龍の鏡』を発動する!!」

それはパラドックスの最後の手札だつた。だから瀬人は驚きを隠せない。

「バカな！ 貴様のフィールドと手札には、融合素材となるモンスターはいないはず！」

「フフフ……。だがこのカードは、素材モンスターをフィールド、または墓地から除外することで融合召喚を行うのだ！」

「何!? まさか……」

瀬人が想像したのは、青眼三体融合。しかし実際に素材として選ばれたのは、5体のモンスターだった。すなわち……。

鉄壁の象徴『ハードアームドラゴン』。

最強の象徴『青眼の白龍』。

災厄の象徴『ダーク・アームド・ドラゴン』。

未来の象徴『伝説の白石』。

権力の象徴『モンタージュ・ドラゴン』。

この組み合わせから出せるモンスターは、1体しかありえない。「闇に沈みし五つの龍魂よ！　いま混沌の渦のなか一つとなりて、凶つ邪神龍の血肉へと生まれ変われ！！

融合召喚！『F・G・D』!!

F・G・D／攻5000

かつて瀬人の前に立ちふさがったこともある五色の邪神龍が、パラドックスの手で召喚された。しかもその血肉の一片には、ブルーアイズも含まれている。

「攻撃力5000級のモンスターが2体だと!?」

「さうに私のライフは『魂吸収』で25000ポイント回復だ!!」

パラドックスLP1100→3600

「瀬人！　お前は第三の選択肢を！　お前とキサラが共に歩む未来を示すと言つたな！　この絶望を前に、何を示せるというのだ!!」「だ、だめ……」

デュエルやモンスターの主導権なく、半ば力尽きていたキサラが意識を取り戻す。Sinトゥルース・ドラゴンの体表に腕を立て、最後の抵抗を試みるが、その白い腕は鈍い色の龍の身体へと呑まれてしまう。

「バトルフェイズ！『Sinトゥルース・ドラゴン』で『青眼の究極竜』を攻撃ッ!!

罪と真実による圧殺!!

(Sinトゥルース・ストレッサー)!!

「だめええええええええ——ツ!!」

攻撃宣言、絶叫悲鳴、巨龍咆哮が重なる中、紅いエネルギー光流が

放たれ、究極竜と瀕人を押し潰さんとする。

「ガツ……!?」

「セト様!!」

負けないで——という切望を裏切つて、事実は二人にのし掛かる。究極竜の美しい翼が、首が、造形が。紅い力に圧し負けて、ひしやげて、崩れて——。

Sinトルース・ドラゴン／攻6500

『VS』

青眼の究極竜／攻4500（戦闘破壊）

地雷が散つたかのような轟音と粉塵こそ起こつたものの、意外なほど呆気ない最期だった。

「あ……ああ……！」

ブルーアイズはキサラの云わば分身で、トルース・ドラゴンとキサラは一心同体。だから実感として分かつた。戦闘破壊に成功したこと、20000ポイントの戦闘ダメージが通つたことも。もちろんそれはパラドックスも同じである。

「勝つた……！　勝つたぞ!!　確実な手応えがあつた！　ついにやつた！　見てるか？　アンチノミー！　アポリア！　ZONE！　私はついにやり遂げたぞ！　これで絶望の未来は変わる！　我々、イリアステルの勝利だ！　ハハハハハハ！」

狂喜の高笑いを上げるパラドックスに対し、キサラは絶望の零石を落とした。

「な……んで」

自分を失意の淵から救つてくれたあの人を、今度は自分が救う番だと思つた。

あまりに短い時間だつたが、その間に互いの愛を確かめあつた。

だから異形の力を姿を受け入れて、時を超えて闘つて……。

なぜ、その異形の力と姿が、あの人を殺めてしまつたのか。

「お前はそういう星の下に生まれているのだ」

自信あるその声は、研究と証明を繰り返した科学者のそれだ。

「キサラ、お前の力と存在は、周りに罪と絶望をもたらすものなのだ。

だが悲観することはない、むしろ誉れと受けとれ。お前と瀬人の絶望が、我々の絶望の穴を塞いでくれるのだからな……」

「う……うつ……」

「さあ、再び1つとなろう。念には念を——さらなる絶望を世界に種として振り撒き、我らが未来の絶望を埋め潰そう……」

キサラの身体が、徐々に龍の身体の中へ沈んでいく。底なし沼に嵌まつたように、蟻地獄に嵌まつたように——。

もはや腰のくびれが見えなりつつも、キサラに抵抗するだけの気高さは残つていなかつた。

(ごめんなさい……セト様……。貴方を救い、貴方の力になる。それが私の望みだつたけれど……)

「私は貴方に——罪と絶望を、与えてしまつた……！　本当に——ごめんなさい……！」

自らの罪に苛まれながら、キサラの身体と魂と涙は、歴史の闇へと消えて——。

パラドックスは何も言ひ返せなかつた。だから代わりに、額から血を流す瀬人に問う。

「何故……？ なぜ生きている!? 確実に、2000ポイントのダメージを食らわせたはずが……！」

「ああ、確かに。並みの決闘者なら、ダメージによつて心身がお陀仏だつたろうな。だが俺は耐えた！ そしてライフポイントは、この2枚のカードによつて回復していただ！」

瀬人の場でリバースしていたのは、チエーン1に『ゴブリンのやりくり上手』とチエーン2にて『非常食』だつた。

『やりくり上手』を先に発動し、『非常食』をチエーン発動！ 逆順処理で、ライフを1000回復後、墓地に眠る『やりくり上手』の枚数——つまり2枚に1枚上乗せした、3枚をドローし、1枚はデッキボトムへ返す！

墓地に眠る『やりくり上手』が2枚なのは、1枚目が『手札抹殺』で、2枚目が『非常食』で墓地へ送られたからだ。

瀬人手札3枚→6枚→5枚

瀬人LP1100→2100→100

「だが！ 今更どれだけドローしようが、どれだけ口上を並べようが、遅い!! 『S·inトルース・ドラゴン』の効果発動！ 戰闘破壊成功時に、相手フィールド上のモンスターを、全て破壊する!! 断罪する千棘の紅!!

(スカーレット・パニッシュ・サウザンド)!!

幾千の紅い針が豪雨となつて降り注ぐ。その裁きにより、瀬人が従える裏守備モンスターは破壊。完全に守り手を失つた瀬人の場を狙うのは——よりによつて攻撃力50000。

???／裏側守備（効果破壊）

パラドックスLP3600→4100

「これで今度こそトドメだ!! 『F·G·D』で、瀬人にダイレクトアタック!!」

五砲五色の破壊光線が鋭く瀬人に迫る。今度こそ打つ手はない。——パラドックスだけが、そう思つていた。

「セト様！ どうか……生きて！ 勝つて!!」

「言わざもがな！ ペーテンよ、我が身を守る盾となれ!!」

デツキから飛び出した道化師が素早く身構え、光線を小さな身体で一身に受けた。当然跡形もなく破壊され尽くしたが、これで瀬人にダメージはない。

F・G・D／攻50000 《VS》闇・道化師のペーテン／守1200（戦闘破壊）

「な、なに？ なぜ、まだ守備モンスターが残っているのだ……!?」

「ふうん、気づかなかつたか？ お前のライフが500回復していたことに……。

貴様は『Sinトルース・ドラゴン』の効果で、1体目の裏守備のペーテンを破壊していたのだ！ だから俺は、1体目を墓地から除外して2体目のペーテンを呼び出し、盾に使ったまでのこと」

『闇・道化師のペーテン』には、墓地へ送られた時に、自身を除外することで後続のペーテンをデツキから特殊召喚できる効果がある。パラドックスのライフ回復は、除外された1体目のペーテンが『魂吸収』のトリガーになつたことによるものだ。もちろん、デツキに3枚入つていれば3体目を呼ぶことも可能だが……。

「そして俺は——3体目のペーテンを特殊召喚しない！」

「なに？ これほどの攻撃をかわした上に、壁も生贊も敢えて残さずに、自分のターンに繋げるだと……!?」

「もう俺には青写真が出来ている！ 俺が死ぬでもない、キサラが死ぬでもない——共に歩む希望の未来が！」

だが、それには手札5枚では足りなかつた。ただ勝つだけなら5枚もあれば可能だということは、瀬人もパラドックスも承知している。

たつた1枚、キーカードが足りていない。次のドローで引けなければ、キサラと共に歩む未来など到底得られないし、更に後のターンまで瀬人が耐えることも不可能。だから瀬人は宣言する！

「いくぞ！ これが、俺の！ ファイナルターネモン!!」

瀬人のデツキが出した答えは——。

瀬人 LP100／手札5枚→6枚／伏せ1枚

モンスターなし

パラドックス LP 4100 / 手札なし / 伏せなし

Sin トゥルース・ドラゴン / 攻6500 (ハムド状態)

F・G・D / 攻5000

魂吸収

SinWorld

## LAST・TURN 『魂の解放』

瀬人LP100／手札5枚→6枚／伏せ1枚

モンスターなし

パラドックスLP4100／手札なし／伏せなし

Sinトルース・ドラゴン（ハムド状態）／攻6500

F・G・D／攻5000

魂吸收

SinWorld

「いくぞ！ これが、俺の！ ファイナルタ——ン！！」

瀬人のデッキが出した答えは——。

「くく……残念だつたな瀬人。カイザー・グライダー、か」  
どうせ最後ならと、瀬人が公開したラストドローは、それほどレア  
でもない☆6のカード。生贊がいたため、召喚もままならない、は  
ずだが。

「いいや！ これで……未来へのロードは繋がつた！

まずは魔法カード『魂の解放』を発動！ 墓地全体から5枚まで  
カードを選択して、ゲームから除外する！

「瀬人、今更ブルーアイズを除外しても遅いぞ！ しかも、除外する  
カード1枚につき、私のライフは500回復する！」

「ふうん。俺が除外するのは、この3枚だ！」

墓地→除外

※ドル・ドラ

※ボマー・ドラゴン

※ブラツド・ヴォルス

パラドックスLP4100→5600

初期ライフ以上を誇っていたパラドックスのライフが更に増え、瀬  
人の50倍以上になつた。

「ククク……これだけライフがあれば、もはや我らの勝利は揺るぎな  
い。まあ負けて死しても目的は達成されるがな」

「いいや！ これ以上のライフ回復さえなければ、ピツタリと削りき

れる！ それに、敗者を死に追いやるデュエルも、もはや終わりだ！

俺は2枚のカードを発動する！ チエーン1にて『大嵐』！ チエーン2に――『異次元からの帰還』だ!!

紫以外の色が忘れ去られた罪深き世界にヒビが入る。隙間から覗くのは、新たな世界。未来への、希望の朝日。

「碎け散れ、罪深き世界！ 希望を繋げ、未来へのロード！ 時空を超えて帰還せよ、我が下僕のモンスター達よ!!」

除外→帰還

ボマー・ドラゴン／攻1000

ドル・ドラ／攻1500

ブラツド・ヴァルス／攻1900

闇・道化師のペーテン／攻500

瀬人LP100→LP50

4体のモンスターを同時召喚——その直後、氷河が砕けるようにして2枚の魔法カードが壊れた。『魂吸収』が、そして罪深き世界、『SinWorld』が。

『SinWorld』が破壊されると、にわかに世界は彩りを取り戻していく。

本来の世界——それは瀬人の未来と夢の塔、海馬コー・ボレー・ションの屋上。丑三つ時を過ぎてから始まり、闇に包まれていたデュエルに射し込むのは――。

「た、太陽……！」

昇りゆく朝日の光を後光にしながら、彼は希望へのファイナルターンを続ける。

「パラドックス！ 貴様にも一応の礼だけは言つておく。貴様の企みがなければ、俺とキサラが時空を超えて再会することなどなかつたらな……。そして俺は、貴様とキサラのカードも使つて、未来に希望を繋ぐ！」

「バカな……キサラはともかく、私のカードだと……!?」 罪と絶望を刻み、誤った歴史を断つために選んだカードで、夢と希望を紡ぎ、未来を繋ぐ……それを瀬人はやろうというのだ。

「魔法カード『二重魔法』を発動！ 手札の魔法カード1枚をコストに、相手の墓地に眠る魔法カードの効力を得る！」

瀬人が為そうとすることが『写し鏡』なら、『二重魔法』の効果も『鏡』。写しとする魔法もまた『鏡』！

「俺は手札から『融合』を捨てることで、さらなる融合召喚の力を得る！」

「な、まさか!?」

「過去に沈みし光を得て——未来を映し出せ！『龍の鏡』!!」

融合素材として現れたのは、先程破壊された『青眼の究極竜』と、その融合素材となつた『融合呪印生物——光』。

「融合呪印生物よ！ いま最もふさわしい姿に、その身を変えよ！」

奇怪な生命体は、再び本来の融合素材モンスターへと姿を変えて

いつた。それは白き龍と同等の能力を持つ、伝説の剣闘士——。

『カオス・ソルジャー』を融合素材にするだと!?

パラドックスは驚くが、これはまだ効果処理の途中。糸はさらに進化する。

「最強の決闘者と、伝説の決闘者——。2つの魂が生み出す結束の力、あらゆる闇と邪神を打ち碎く！」

融合召喚！ いでよ、究極竜騎士——マスター・オブ・ドラゴンナイト！」

墓地↓除外

※ 融合呪印生物——光

※ 青眼の究極竜

究極竜騎士／攻5000

『究極竜騎士』は、その名に恥じぬ武具と防具と乗騎を揃え、太陽の光を浴びながらフィールドに降臨した。

「次はキサラのカードだ！ 魔法カード『戦線復活の代償』を発動！ フィールドから通常モンスター『ブラッド・ヴァルス』を墓地に送ることで発動！ 墓地のモンスター1体を復活させ、このカードを装備する！ 俺が選んだカードは——」

パラドックスのデュエルディスクから一枚のカードが風を切つて

飛び出し、そしてしつかりと瀬人の指に止まる。

「進化の光と古の威光、いま一つとなりて、守護の光となる！蒼天を臨む銀嶺が如く、ここにそびえ立て！」

デュエルディスクが異常な演算によつて悲鳴を上げるのにも構わず、瀬人はその龍の名を呼ぶ。時空を超えて現れたその名は——。

「蘇生召喚！ 蒼眼の銀龍!!」

蒼眼の銀龍／攻2500（キサラの墓地→瀬人の場）

『ブラッド・ヴァルス』がいなくなつて空いたフィールドに、『蒼眼の銀龍』が音を立てて降臨する。瀬人の足腰もデュエルディスクの処理能力も限界に近かつたが、次の効果発動まで何とか耐えきつてみせた。

『蒼眼の銀龍』の効果、『ホワイトフレア・サンクチュアリ』を発動する！

『蒼眼の銀龍』『究極竜騎士』『ボマード・ドラゴン』『ドル・ドラ』の4体はカード効果で破壊されず、効果の対象にもならない！

4体の竜のそれぞれが白い光の気流を纏う。残る1体——『闇・道化師のペーテン』はその加護を受けないが、すぐにフィールドを離れることとなる。

「さらにペーテンを生贊に、レベル6の『カイザーグライダー』を召喚する！」

『カイザーグライダー』は金色の竜——ドラゴン族だ。これで瀬人のフィールド全てを、5体のドラゴンが埋め尽くした。

『究極竜騎士』の効果適用！ 自分フィールドのドラゴン1体につき、このモンスターの攻撃力は500ポイント上昇する！ よつて究極竜騎士の攻撃力は——

究極竜騎士／攻5000→7000

「攻撃力7000……！ 我が身、Sinトウルース・ドラゴンを上回るだと……」

戦闘破壊による敗北が見えたにも関わらず、パラドックスの驚きは少ない。なぜなら……。

「ククク……。とうとう諦めたか、瀬人。いいだろう、そいつで攻撃し

てくるがいい！ 究極竜騎士の攻撃で、キサラと私もろとも、望みを絶つがいい!!」

「——バトルフェイズ！ 俺は、『究極竜騎士』で攻撃する！ ギヤラクシーカラツシャー!!」

剣の煌めきと爆裂疾風弾が1つになつた一撃は、敵のドラゴンを貫いた——。

そう——。

『F・G・D』を！

究極竜騎士／攻7000

『V S』

F・G・D／攻5000

パラドックスLP5600→3600

「な、なに!? バカな瀕死！ お前はわざと負けてキサラを救つた気ででもなるつもりか!?」

「続いて『ボマー・ドラゴン』で、『S·in トウルース・ドラゴン』に自爆特攻する!!」

攻撃力の差もなることながらその体格差も、隼が飛空挺に向かつて行くかのごとく、まるで話ならない。

「ボマー・ドラゴンの効果！ 自爆特攻するときの戦闘ダメージをゼロにする！」

「そんなことは分かつている！ お前の狙いもな！ ボマー・ドラゴンにはさらに、自爆特攻した相手モンスターを効果破壊するが、『ハードアームドラゴン』が与えた耐性によつて、その破壊は無効だ!!

迎撃させてもらう！ 罪と眞実による圧殺（S·in トウルース・ストレッサー）!!」

ボマー・ドラゴン／攻1000

『V S』

S·in トウルース・ドラゴン／攻6500

ボマー・ドラゴンはS·in トウルース・ドラゴンが放つた攻撃の重力を搔き消され、遺された爆弾が慣性で巨体にぶつかるも、白煙を虚しく上げるだけ。

だが、決して——。

「無意味な犠牲だな」

「無意味な犠牲ではない！俺とキサラ……。そしてお前自身の全てがパズルのピースとなり、未来へ至る第3のロードを描き出す！」

『S·inトウルース・ドラゴン』の強制誘発効果を発動してもらうぞ、パラドックス！』

S·inトウルース・ドラゴンの強制誘発効果は、戦闘で相手モンスターを破壊した場合、相手フィールドのモンスターを全て破壊する『断罪する千棘の紅（スカーレット・オブ・サウザンド）』。その尖った雨が、パラドックスの意思に関わりなく放たれる。

しかし、瀬人のモンスターは『蒼眼の銀龍』の効果「ホワイトフレア・サンクチュアリ」によつて守られた。

「ただ1体を除いて、な！」

光の破片となつて碎け散つたその1体とは——蒼眼の銀龍より後に召喚された、『カイザー・グライダー』！

「破壊されたカイザー・グライダーの効果発動！ 場のカード1枚を……破壊ではない——！ バウンスしてもらう！ 無論、俺が対象に取るのは、S·inトウルース・ドラゴン！」

パラドックス、キサラ、S·inトウルース・ドラゴンが一体となつたその巨体を包むほどの、強烈な上昇気流が巻き起こる。

「ば、バカな……！ こんな、手でエ……!?」

「カードに戻れ！ 罪と真実を嘲笑う竜よ!!」

カイザー・グライダー（効果破壊）

タイラント・ネプチューン（場→手札）

三位一体の龍の断末魔は、気流の轟音に呑まれて満足に響くことはなかつた。後に残つたのは……。

「ぐ、グ……ウ……！ ま、まだ……私は……！」

青と黒が混じつた眼の少女。逆刹の執念がキサラに憑りつく様だつた。額を抑えながらフラフランと立つ濁つた眼の少女に対し、「トドメだ！ ドル・ドラで、キサラの中に残るパラドックスヘダイレクトアタック!!」

「ぐああああ———っ！」

ドル・ドラ／攻1500 『VS』（直接攻撃）  
パラドックス LP3600→2100

龍の長老が火炎弾を放つ。今度こそ忌まわしい呪縛から解放された彼女は……。

「セト……。もう、終わりに、して……」

震えながらも両の脚で立ち、最後の一撃を望む。彼は領き応えて、「ああ、これで終わりにしてやる。

そして新たに始めるのだ、俺たちの未来を！」

信念を込めた指先で、力強く攻撃を宣言する！

「蒼眼の銀龍！ キサラにダイレクトアタック！」  
清浄なる光が、キサラの全てを包みこんだ——。

蒼眼の銀龍／攻2500 『VS』（直接攻撃）  
キサラ LP2100→0

## TURN · END

ライフが尽きたキサラは、精魂果ててガツクリと膝を着いた。小さく縮こまつた彼女を、透き通るほど白く朝日が照らしていた。

「キサラ！」

自分の身体に突き抜ける激痛を物ともせず、瀬人は彼女の元へ駆け寄る——と。

「ありがとう……。セト、さま……」

キサラの身体が霧のように薄くなつていき、向こう側の街並みが見えるまでになつた。

「あ、はは……。せつかく、セト様が魂を、賭けてくれた、のに……。やつぱり、ダメ、みたいですね……。」

その症状は時間とともに酷くなり、キサラの濃度と反比例して、光の粒子が大量に天へ昇つっていく。

「ば、バカな!? 閻のゲームを強いる『S i n W o r l d』は破壊した！『S i n T o u r l e s s · D r a g o n』も、お前もろとも破壊しないよう細心の注意を払つて攻略した！ なのに——何故!?」

「やつぱり……。世界が違うのかも、しれませんね……。あなたを想うこととは、罪、だつたのかも……」

官僚と流民。白人と黒人。ドラゴンとデュエリスト。モノとヒト。古代人と現代人。死者と生者……。

「あなたの力になりたかった。一秒でも長く、あなたを感じ、あなたの傍に、いたかつた……！ でも……！」

涙を浮かべた青い眼に、精一杯の笑みをつくつて告げた。  
「さよう、なら。セト様。 あなたは、ひとりでも、未来へ……駆けて

……」

瞬間。気がつけば抱き締めていた。

肌の張りも跳ね返らず、存在が曖昧になりつつあることも気に止めず。彼は抱き締めた。二人の頬を熱い逆りが伝つていた。

「ふ……ふ……。諦めの、わるい、ひと……。」

キサラが淡く抱き返すと、瀬人は力強く魂の叫びを上げた。

「ああ！諦めない！ 諦め屈してたまるか！」

俺は三千年の時を超えてやつとわかつたんだ！ お前が、ブルーアイズが、デュエルが気づかせてくれたんだ！」

「敗者には死を——それが全くの間違いではない！ だが——勝利か敗北か、生か死の二択を強いるルールや闇こそ、本当に超えるべきものだつたんだ！ 見えるけど見えないもの——第三の選択肢があつたんだ！」

「俺が生きてお前が死ぬ……。そんな見え透いた選択肢にはもう惑わされない！ いまここでお前が消えても、絶対に、何千年かかってもお前の笑顔を手に入れてみせる！ 絶対に手に入るのだ！ どうせ手に入るものなら、いま手に入れても同じだろう!?」

「だからキサラ！ 諦めるな!! 諦めるだけ無駄なのだ！ 本気で願い、魂を賭けてみせろ！ いつの日か結ばれる二人なら——いまここで1つになることの何が悪い!?」

かつては罪深い愛だつた。それに対し運命は、永きの別れという罰を与えた。

しかし——。

「俺達が愛を欲することが罪だというなら——。」

時空を超える記憶は再び愛を繋ぎ——。

「そんなくだらん罪を定めるルールは、俺が壊してみせる!!」

数千年の呪縛を打ち碎く——!!

「わたし、だつて……。私だつて……!! もしも、許されるなら……ううん、誰からも許しを得られない想いだとしても……!!」

消えゆく指先に精一杯の力を込めて、愛しい人に抱き着きながら彼女は発露した。

「あなたの力になりたい！ あなたの傍にいたい！ 私は……！」

「私は——！ あなたと共に、『生きたい』!!」

そのとき——。

キサラの身体が、超新星の産声のごとく輝いた——!!

——。

——光が止むと、ビルの屋上には影2つ。

ひとつは海馬コーポレーション社長、神官セトの生まれ変わり——

海馬瀬人。

そしてもうひとつは……。

「え……？ わ、わたし……は……」

消えもせず、死にもせず、彼女はそこにいた。

艶があり川のように流れる銀髪も、雪のように白い肌も、深く澄んだ海のような青い眼も、スラリとした手足も失われず。

キサラは間違なく——人間としての生を受けていた。

「良かつたな……キサラ！ 本当に……よかつた！」

「……本当に、いいの？ 私なんかが……あなたと生きて……！」

未だ我が身に起こつたことが信じられず、涙ぐみながら確かめた。「他ならぬ俺たち自身が選んだ道だろう？ 誰にも否定させない。誰にも邪魔させない。

——共に生きよう、キサラ」

「う……うわあああああん……！」

歳相応、女の子として相応な号泣。服が濡れることにも構わず、瀬人は共に涙を流しながら受け止めた。

「怖かつた！ ずっと、ずっと……あなたを待ち続けていたけれど……つ」

「ああ、待たせて悪かつたな……」

「自分のいるべき場所も、許される場所もなくて……ずっと不安で……つ」

「大丈夫だ。これからは、一人ともに生きていく……」

「うわあああああん……！」

新しい未来を見つけた二人を、昇りゆく朝日が祝福していた——。

## NEXT・TURN（最終回）

世界に名を轟かす大企業『海馬コーポレーション』は、今日も平常通りに業務中である。

そこはいつもと変わらない、社内のデュエル実験室だった。ソリッドヴィジョンの改良や新カードのテスト、コンピューターアイとのデュエルを行う部屋である。部屋の前に設置された時計は、午後2時を知らせていた。

その部屋へ、デュエルディスク片腕に入つていく一人の男に、「お待ちしておりました。セト様……」

そう呼びかけた先客は……。

「ふうん、待たせて悪かつたな。

——キサラ

ややゆとりを持たせた白いスーツを着た、キサラだった。

あのデュエルを終えた後、瀬人は有象無象の疑問や問題を振り払い、キサラを海馬家と海馬コーポレーションに迎えた。まだ籍も入れていなければ拳式もしていないが、そう遠くない話だろうとはお互い考えている。

パラドックスの呪縛からは解放されたキサラだが、やはり元が4枚目の『青眼の白龍』なだけはあった。戦闘力、古代魔術の技能、カードの魔力や精霊を感じ取る力、決闘者としてのタクティクスにおいて、海馬コーポレーションに通用するものがあった。元々家事は執事やメイドが全てやってしまうという事情もあって、キサラはボディガード兼秘書、場合に応じてカード開発部門の補佐として瀬人やモクバの周りで働くようになった。

そして今日、キサラがデュエル実験室にいるのは——。

「いえいえ！ 私もこのカードを回収して、今この部屋に入ったところですから」

そう言つてキサラがポケットから出したのは、『ハネワタ』。海馬コーポレーションが開発した、チユーナーモンスター第1号である。パラドックスが未来から持ち込んだカードは、『青き眼の乙女』『蒼

眼の銀龍』『龍の鏡』の3枚だけを残して、パラドックスと共に消滅してしまった。しかしKCとI2、キサラと瀬人に加えて武藤遊戯や天馬夜行、ペガサスの協力も得て、先日ついにチューナーモンスター『ハネワタ』が完成したのである。

目指すはシンクロモンスター及びシンクロ召喚の実用化。そして、モーメントの暴走による人類滅亡が起ころる前に、モーメントに代わるエネルギーを開発することであった。

「では。闘ろうかキサラ！ 遠慮は要らん、本気でかかつてこい!!」「はい！ セト様も、うつかり負けたら、カードの貴公子の名が泣きますよ！」

愛する人なき絶望の未来とも、暴走による滅亡の未来とも違う。彼らは、光差す第三の未来へと、歩み始めていった――。

「「デュエル!!」

瀬人V S キサラ／時空を超えた記憶／

完

# EXTRA・TURN 「キサラVSドツペルゲンガ」 (オリカなし新マスターールール2019) TURN0 「未界域のドツペルゲンガー」

「暑い……」

木漏れ日すら鋭い熱帯雨林は、湿度の高さも相まって、彼女——キサラには非常に厳しい環境であった。

「3000年前のエジプトなんて……まだ涼しかつたんじやないかと……錯覚しますよこれは……。まさか例の事件つてただの熱中症じやないでしようね……?」

「白き龍」としての生命力と魔力で多少の誤魔化しは効くものの、つい息を切らせながらの独り言が挿つてしまう。

なぜ彼女が時空を超えて伴侶になれた筈の瀬人とも、彼の会社の部下とも離れ、こんな南米の熱帯雨林をさまっているのか。

享楽のためではない。

最新のレジヤー用ウエアの性能テストでもない。

それは彼女が先ほど一人愚痴つていた、「例の事件」と関係している。

「昏睡3名、発狂2名、行方不明が3名、ですか……」

「ああ。人数だけでも酷い有り様だらう?」

そんな相談を瀬人がキサラにしたのは、10日前のKC社長室のことだ。

「南米に海馬ランドを作るにあたり、現地の風土や伝承を調査しに森林へ入った小隊が最初の被害者だ。それの救助隊や追加の調査隊なども続々と被害に逢い、今やこの人数……という訳だ」

瀬人がため息をつくのは、単なる被害の大きさだけが理由ではない。原因が不明で解決の見通しが立たないからである。

もちろん、手がかりが無い訳ではない。発狂して生還した2名の証言がある。だが、うわ言やら寝言やら心理学的な聞き取りやらの中か

ら信憑性の高そうなキーワードを繋ぎ合わせて導かれた答えは、『地図にもない、コンパスも効かない場所に1人で迷い込んだ後、もう1人の自分に襲われた』

という突拍子もないものである。

「瀬人様に言わせれば、『また妙なオカルト話か』——といったところですか？」

「だからこそお前に頼みたい、ということでもある」

瀬人はずいぶん長い間、千年アイテムや三千年の輪廻因縁に関することで苦労してきた。千年アイテムが地上から消えた今も、世界は瀬人が知る科学では論理的に説明がつかない事象に満ちている。

だが今の瀬人には、頼れる彼女がいる。論理的には説明がつかない、三千年の絆と記憶で繋がった『キサラ』が！

「俺は別件で手が離せん。キサラ、お前に南米へ飛んでほしい。『白き龍』の力を持つお前なら大丈夫だろうとは思っているが、くれぐれも気をつけてな」

「はい。何年でも何度でも、貴方の力になりますよ」

そしてキサラは、暑さに苦しめられながらも、見えざる敵と自分自身の思惑通りの状況に踏み入っていた。

一瞬汗を拭うために目を瞑った隙に消えてしまった同行者たち。地図にない川のせせらぎ。デタラメに回り続けるコンパス。デジタル腕時計がまだ正しく動いているなら、証言通りの術中に陥つたのはほんの5分前程度か。その5分間で、キサラは鬱蒼とした森から、せせらぎの音源である小川に出ることができた。

「ちょーっとだけ、涼しいですね」

滝のように流れ、白い肌も銀の髪も濡らしていた汗をタオルで拭いながら、しばし涼む。

直射日光こそ直撃するものの、湿度を無駄に上げる木々がなく、小川に沿つて緩やかな風が流れているが故だつた。

この涼しさの源泉である小川を少し観察してみる。

ギリギリで一足飛びこそ出来なさしだが、歩いて渡れそうな程度

の浅さで泥も舞い上がっていない清流である。屈んで見てみれば、鏡のようないきサラが“二人”映る程の水質——。

「——ツ!!」

『もう一人のキサラ』に首を締められそうになり、反射的に右手だけ『白き龍』の異形を顕し、振り向きざまに剛爪で反撃する。だがその斬撃は『もう一人のキサラ』が飛び退いたことで空振りに終わつた。

「おーっと、危ない危ない！　ただの女の獲物かと思つたら、とんだ化物だつたらしいぜ！」

銀の髪も青の眼も服装もキサラと瓜二つだが、声だけはキサラよりも少し低い、中性的なものだつた。

「獲物に化物と、好き放題言つてくれますね？　私には『キサラ』というちやんとした名前があります。貴方も名乗られては？」

普段の穏やかな口調からも怒りが滲み、右手を龍の爪にしたまま睨みつける。

「おー怖い怖い！　俺の名はドッペルゲンガー。だがすぐに『キサラ』に改名するぜ。お前の存在を乗つ取つてな！」

「ではやはり一連の事件は貴方が……」

出くわせば自分が死ぬという超常現象『ドッペルゲンガー』を名乗るこの者が下手人だつたのか。

「あんたと同じ服装の連中か？　乗つ取つてやろうかと思つたんだが、どいつもこいつも乗つ取る値打ちが無さそうだつたんでな。まあ二人だけ一旦キープしてやるけど」

「我なら乗つ取る値打ちがあると？」

「あるねエ！　これでも最低限の世俗は知つててさ！　あんた海馬瀬人の伴侶だろ？　俺が乗つ取るには最高の条件の相手だぜ！」

「素直に私が応じるとでも？」

キサラは、今度は両手とも龍の姿を顕して戦意と力を見せつけるが——。

「待て待て！　こんな暑苦しい場所で肉弾戦なんて止そやぜ！　ここはデュエルと行こうじゃないか、俺のデツキも見てもらいたいしな！」

「…………。」

この提案を無視して爪で引き裂くというのもアリではあるのだが、どうせ「勝つ自信がないから肉弾戦が良いんだろ?」と挑発されれば乗らざるを得ない訳だし、無闇やたらに龍の力を解放するよりはデュエルの方が割が良いのは事実だった。龍の爪による脅しを止めて、条件を取り付ける。

「私が勝つたら、私も含め、貴方が今まで出した被害者を全員解放してもらいますよ?」

「俺が勝つたらアンタの身体と名前を頂くぜ。『キサラ』に成れたならどつちにせよアンタ以外は用無し! 全員解放するから安心してデュエルしてくれよな」

かくして、キサラはバツクバツクから手際よくデュエルディスクを出し、ドッペルゲンガーは何処からともなくデイスクを具現化させ、デュエルを開始した。

「「デュエル!!」

キサラ LP 8000

《《VS》》

ドッペルゲンガー LP 8000

# T U R N 1 『青眼の精霊龍』

キサラ LP8000

《V S》

ドツペルゲンガーレ LP8000

デイスクの自動決定により、先行はキサラから。

「私のターン。手札から『伝説の白石』を捨てることで、『ワン・フォーウン』を発動！ その効果で、レベル1チューナー『青き眼の乙女』をデッキから特殊召喚！」

白石も乙女も、かつてキサラの身から零れ落ちたカードであり、『青眼の白龍』と所縁ある特殊効果を備えている。まずは『伝説の白石』が墓地に送られたときの強制効果で『青眼の白龍』が早速キサラの手札に加わった。

青き眼の乙女／攻0（デッキ→場）

青眼の白龍（デッキ→手札）

キサラ／手札5→3→4枚

「へえ……まさかあの海馬瀬人がブルーアイズを貸すとはな。もしかして3枚とも借りてきたのか？」

「3枚目を挙む前に貴方が負ける可能性もありますけどね。2枚目はすぐお見せしますよ。レベル1の『伝説の白石』を墓地から除外し、レベル1の『青き眼の乙女』を対象に取ることで、『モンスター・スロット』を発動！」

キサラの背後にスロットマシーンが出現。スロット左列と中央にはレベルを示す星が1つずつ出ている。今からドローすることで右列のスロットが止まり、同じレベル——今回ならレベル1——がズラリと揃えばドローカードを特殊召喚出来る。しかしキサラの狙いはそこではない。

『モンスター・スロット』の対象となつた『青き眼の乙女』の効果をチーン発動！ デッキから出でよ——『青眼の白龍』!!

青眼の白龍／攻3000（デッキ→場）

伝説の白石→除外

『モンスター・スロット』の効果によるドローカードは、罠カード『パワード・ウォール』。スロットマシーンは寂しげに止まり、特殊召喚も出来ないが、ドローカードはそのまま手札に加わる。

「1ターン目からブルーアイズを出してきたか。しかもまだ通常召喚してないな?」

「今からしますし、私のデッキの力は白き龍だけではありません！ チューナーモンスター『青き眼の賢士』を通常召喚！」

『青き眼の乙女』に端を発する「青き眼」シリーズの魔法使い族、それがもうひとつの中ツキ・キーパー<sup>ツ</sup>だつた。キサラの故郷の思い出を原典とし、白き龍や「青き眼」一族同士での共闘を可能にする能力を備えている。

『青き眼の賢士』召喚成功時の効果！ デッキからレベル1の光属性チューナー、『エフェクト・ヴェーラー』を手札に加えます！

これで場には、青年と少女でチューナーが2体。

「青き眼の乙女と賢士で、連續リンク召喚！ 『リンクリボン』を経由し——リンク2、『水晶機巧——ハリファイバー』！！

水晶機巧——ハリファイバー／攻1500

水晶の翼を持つ、小さな等身と高くはない攻撃力に反して、無限大の可能性を秘めた強力なリンクモンスターの召喚に成功した。

「リンク召喚成功時の効果発動！ デッキからレベル3以下のチュナーを特殊召喚します！」

ハリファイバーの翼が輝き、デッキから新たなモンスターを呼ぶシグナルとなる。

——その身体と翼を碎け散らせながら。

「えつ？」

「悪いがその効果に、俺の手札に潜む妖怪、『幽鬼うさぎ』をチーンさせてもらつたぜ。」

なるほど確かに、ハリファイバーの崩壊の中心には、呪符が刺された跡がある。しかしハリファイバーは破壊されつつも最期にその効果を遺した。

「ハリファイバーは失いましたが、その効果は使わせて貰います！」

デツキからレベル1チューナー『太古の白石』を特殊召喚！

水晶機巧——ハリファイバー（破壊）

太古の白石／守500（デツキ→場）

ドツペルゲンガー／手札5枚→4枚

幽鬼うさぎ（ドツペルの手札→墓地）

「そして、レベル8のブルーアイズに、レベル1の『太古の白石』をチューニング！」

キサラが場に居る2体から繋いだのはシンクロ召喚。集いし星の数は9つ。

「天と地を司る精霊の力を、青き眼に宿せ！　シンクロ召喚！『青眼の精霊龍』!!」

青眼の白龍（シンクロ素材）

太古の白石（シンクロ素材）

青眼の精霊龍／守3000

进るエネルギーが金の爪や棘として顯れ、原典たる『青眼の白龍』より雄大な翼を広げる——。

「これがブルーアイズの進化と未来の1つです！」

「天地を司る、ねえ……。『天』空からのペンデュラム召喚をはじめとする複数体同時召喚を封じ、墓『地』で発動する効果を1ターンに一度無効にする守備力3000とは、厄介なもんを呼んでくれやがったな」

ドツペルゲンガーは冗談ではなく本当に嫌そうな顔をするが、キサラのターンはまだ終わっていない。

「カードを2枚セットして。墓地に眠る『太古の白石』には効果が2つあります。1つ目の効果を発動し、墓地からブルーアイズの龍族を回収します。」

キサラが回収するのは、シンクロ素材になつた『青眼の白龍』だ。

キサラ／手札4枚→2枚→3枚／伏せ2枚

「エンドフェイズに入り、2つ目の効果を発動です。墓地に送られたターンのエンドフェイズに、デツキからブルーアイズの龍族を特殊召喚します。」

「3枚目の『青眼の白龍』のお出ましか?」

「まあそれも面白そうですが……。私が喚ぶのは『青眼の白龍』の聖なる影——。出でよ、『白き靈龍』!」

白き靈龍／攻2500（デッキ↓場）

影というだけあって、攻守は実体より500ずつ低い上にその身は透けており、所々鋭利なはずの部分が丸くなってしまっている。だが『影』を捉えようとすれば手札の『実体』へとサクリフアイス・エスクープ出来る点は、『実体』側にはない器用さである。

かくしてキサラは、サクリフアイス・エスケープ出来る最上級モンスターが2体、『エフェクト・ヴェーラー』『青眼の精靈龍』と伏せカードによる妨害付きで先行ターン終了である。

キサラ LP8000／手札3枚／伏せ2枚

青眼の精靈龍／守3000  
白き靈龍／攻2500

## TURN 2 『手札抹殺』

キサラ LP 8000 / 手札 3 枚 / 伏せ 2 枚

青眼の精霊龍 / 守 3000

白き靈龍 / 攻 2500

続くドッペルゲンガーのターン。

「俺のターン！『手札抹殺』発動！」

(ヴェーラーとブルーアイズを捨てさせられた!?)

互いに手札の総入れ換え。ほぼ偶然に近い成り行きとはいえ、キサラの『エフェクト・ヴェーラー』は捨てさせられ、『白き靈龍』はエスケープ先を失う。

※キサラが捨てたカード

※青眼の白龍

※青眼の白龍

※エフェクト・ヴェーラー

だが――。

「クッククック……」

ドッペルゲンガーの狙いは、別のところに、ある。

「ブルーアイズの進化に影。とくと見せて貰つたぜ。次は俺が見せてやるよ。未だ開かれざる界域に潜む、恐るべき獸性をな!! 墓地から誘発効果を4連続発動!!」

「何ですつて……!?」

ドッペルゲンガーの墓地から4枚の写真が飛び出す。それは、『手札抹殺』で手札から墓地に捨てられた魔物たちの記録であり、これら起ころる現象の予言であった。

「チエーン1『未界域のネッシー』！ その巨影には、未だ誰も見ぬ魔物が潜んでいる！」

チエーン2『未界域のオゴポゴ』！ 自身が深淵に沈むとき、未界域の記録や同胞を、深淵の肥やしとして道連れにする！

チエーン3『未界域のサンダーバード』！ その羽根が地に落ちるとき、未だ誰も見ぬ敵すらも粉碎される！

チエーン4『未界域のワーウルフ』！ その咆哮は、未界域に仇な  
す者を萎縮させる！

『青眼の精霊龍』で止めるか？ お前が止められるのはワーウルフ  
だけだがな！』

自分の対応を決める前に、キサラは『未界域』の名を冠するカード  
のテキストを見ながら考えを巡らせる。何故なら。

(……初めて見るカードばかり……)

無論これはキサラが決闘者として未熟無知だからではない。彼女  
は今、KCでカード関連の研究や開発に携わっている身だ。全ての  
カードのテキストを覚えているとまでは流石にいかないが、全くカー  
ド名もイラストも未だ知らざるものだとなれば、これはI2社やKC  
と関係ないカードの可能性が高い。

テキストを一通り読んだ彼女の所見としては、デッキ圧縮に繋がる  
らしきネッシャー やオゴポゴ、直接アドバンテージを奪いに来たサン  
ダーバードを止めたいたところだつた。しかしワーウルフに阻まれて  
干渉出来ない。とはいえ――。

『青眼の精霊龍』の効果発動！ 墓地で発動したワーウルフの効果を  
無効にします！』

「やつぱり無視出来ないよなあ？ でもその効果は1ターンに1度だ  
け……」

『青眼の精霊龍』のもうひとつ効果も発動！ 自身をリリースして  
疑似シンクロ召喚！』

「うん……？」

精霊龍の身体は光球となつて昇天してしまつたが……。

「さうに！サンダーバードの対象になつたりバースカードをオープン  
！ チエーン7にて『戦線復帰』！ チエーン6で『青眼の精霊龍』を  
リリースしているので、これを復活させる対象として選択出来ます  
！」

「おいおいおい……」

ドツペルゲンガーの4連続チエーンに対し、キサラは3連続  
チエーンで対抗してきたところで逆順処理に入る。

7つ数えればつい先ほど消えた筈の『青眼の精霊龍』が戦線復帰のカードの中から復活。

6つ数えれば『青眼の精霊龍』が昇天した空から、重量感で大地に衝撃を響かせながら『蒼眼の銀龍』が轟臨。

5つ数えればワーウルフの写真が精霊の力で搔き消され。4つ数えればサンダーバード最期の突進で『戦線復帰』のヴィジョンに風穴が開き——。

「チエーン2のオゴボゴで『未界域調査報告』を埋葬。チエーン1のネッシャーの効果で『未界域のジャッカロープ』を手札に加えるが……」「全ての処理が終了後、『蒼眼の銀龍』の効果、ホワイトフレア・サンクチュアリで強力な耐性を付与です！ 効果では破壊されませんし効果の対象にもなりません！」

ドツペルゲンガー／手札5枚→4枚→5枚

未界域調査報告（デツキ↓墓地）

未界域のジャッカロープ（デツキ↓手札）

蒼眼の銀龍／守3000（EX↓場）

青眼の精霊龍／守3000（蘇生）

「おい、その戦線復帰したヤツって……」

「1度フィールドを離れたので、また妨害が出来ますよ」

ちよつと誇らしげなキサラに対し、全く顔立ちは鏡映しであるはずのドツペルゲンガーは顔をしかめるしかなかつた。だがリバースカードが減つたのは事実だし手札も悪くない。とりあえず動くしかない。

「未界域の案内人たる『魔界発現世行きデスガイド』を通常召喚。その効果で『クリッター』をご案内だ」

ドツペルゲンガー／手札5枚→4枚

魔界発現世行きデスガイド／攻1000

クリッター／攻1000（デツキ↓場）

「そして！ 手札から『未界域のビッグフット』の効果発動！」

手札から発動したカードは1枚であるにもかかわらず、ドツペルゲンガーの4枚の手札全てが其の手から投げ放たれ、キサラの前に扉の

よう立ち塞がつた。

「4つのカードの扉から1つ選べ。この中から、未だ見つからざるビッグフットを見つけられたのなら、墓地へ葬ることが出来る。外せばお前はビッグフットの奇襲を許すことなる」

「……右端の扉を選びます」

迷ったところで結果が良くなる訳でもないので、手早く選んだ。その結果は――。

「ハズレ。葬られたのは『未界域のジャッカロープ』だ。よつて左端の扉に潜んでいたビッグフットは特殊召喚され、俺は1枚ドロー出来る！」

左端の扉からは窮屈そうに大人の倍ほど背丈を誇る巨大獣人――『未界域のビッグフット』が現れ、中央2枚の扉はドツペルゲンガーの手札に戻り、右端の扉の先ではツノ持つ野ウサギ――『未界域のジャッカロープ』が血を流して倒れていた。

未界域のビッグフット／攻3000（手札→場）

未界域のジャッカロープ（手札→墓地）

ドツペルゲンガー／手札4枚→2枚→3枚

「葬られたジャッカロープの効果！　この未知にして美味なる屍肉には、未界域の魔物が群がる……。つまり、デツキから新たな未界域モンスターを守備表示で現れるんだぜ！」

「つ！　『青眼の精霊龍』の効果で無効！」

ランク8を警戒したキサラは妨害効果を使わざるを得なかつた。ジャッカロープの血も亡骸も、精霊龍が放つた光で浄化されて消えていく。だが……。

「手札に潜む『未界域のチュパカブラ』をコストに、墓地に埋葬している『未界域調査報告』の効果発動！　調査報告資料をデツキに回収して1枚ドロー！　もちろん本命はチュパカブラを贅にすることだがな！」

展開に繋がる未界域の魔物は、ジャッカロープだけではない。「捨てられたチュパカブラの効果発動！　その血肉は、別の同胞に受け継がれる！　『未界域のサンダーバード』を蘇生召喚！」

ドツペルゲンガー／手札3↓2↓3枚

未界域のチユパカブラ（手札↓墓地）

未界域のサンダーバード／攻2800（墓地↓場）

その怪鳥は雷電迸る紅き大翼をはためかせて出現したが、攻撃力は未だドラゴン達の脅威とはなり得ない数値だ。

故に――。

「続いて、デスガイドとクリッターをリンク2に変換！ 未界域の空を舞う飛行物体『見習い魔嬢』をリンク召喚し、こいつがもたらす闇で俺のモンスターを強化しつつお前のドラゴンを弱体化させるぜ！ さらに素材になつた『クリッター』の効果で『メタモルポット』をサーチ！」

「うつ……まづい！」

いま中空を舞い、黒い霧をばら蒔く『見習い魔嬢』は、闇属性モンスターのステータスを500上昇させるが、同時に光属性モンスターのステータスも400減少させる。キサラのモンスター達との相性は最悪である。

ドツペルゲンガー／手札3↓4枚

魔界発現世行きデスガイド（リンク素材）

クリッター（リンク素材）

メタモルポット（デツキ→手札）

見習い魔嬢／攻1400↓1900

未界域のサンダーバード／攻2800↓3300

未界域のビッグフット／攻3000↓3500

蒼眼の銀龍／守3000↓2600

青眼の精靈龍／守3000↓2600

白き靈龍／攻2500↓2100

「まだまだア！ そのドラゴン達は全て退場してもらう！ 装備魔法『未界域捕獲作戦』をビッグフットに装備！」

装備魔法に合わせ、巨大獣人に大きな網が被せられるが、隆起した筋肉によつてそれは破り捨てられる。

「このカードを装備させられたモンスターは、捕獲作戦への抵抗力で

攻撃力が800アップし、モンスターへの2回攻撃と効果破壊耐性を得るぜ！」

ドッペルゲンガー／手札4→3枚

未界域のビッグフット／攻3500→4300

→未界域捕獲作戦を装備

「このままバトルだ！『未界域のサンダーバード』よ、EXモンスター ゾーンに居座る銀龍を空から襲撃しろ！」

『蒼眼の銀龍』に向けて、上空から紅い羽根と雷の矢が降り注ぎ、やがては耐えきれずに爆散してしまった。

未界域のサンダーバード／攻3300

《VS》

蒼眼の銀龍／守2600（戦闘破壊）

「くう……っ！」

「ビッグフットよ、その剛腕を2度振るい、朧気な靈龍どもを地に薙ぎ倒せ！！」

「罠カード『パワー・ウォール』！ デッキトップから5枚のカードを墓地に送り、2500以下の戦闘ダメージを無効にします！」

捕獲作戦による強化も手伝つてか、その巨体に似合わぬ素早い連続攻撃で、『白き霊龍』と『青眼の精霊龍』が吹き飛ばされてしまう。そしてキサラにも突風の奔流が襲い掛からうとしたが、それはデッキトップから飛び出した5枚のカードが巨大な盾となつて受け止めた。

パワー・オールで墓地に送つたカード

》青き眼の祭司

》クリアクリボー

》復活の福音

》シャツフル・リボーン

》霊廟の守護者

未界域のビッグフット／攻4300（2回攻撃）

《VS》

青眼の精霊龍／守2600（戦闘破壊）

白き霊龍／攻2100（戦闘破壊）（ダメージ無効）

『復活の福音』で破壊を無効にすることも出来たが、破壊されたからこそ使えるカードもあつた。

「ドラゴン族が戦闘破壊されたので、墓地から『靈廟の守護者』を特殊召喚します！　さらに、『白き靈龍』が墓地では通常モンスター扱いなので、追加効果で『青眼の白龍』の回収もできます！」

靈廟の守護者／守2100→2500（墓地→場）

青眼の白龍（墓地→手札）

キサラ／手札3枚→4枚

『靈廟の守護者』は『見習い魔嬢』本人の効果でステータスが上がりおり、これでダイレクトアタックは無いかと思われた。しかし、「フウン、中々のしたたかさだが……甘いぞキサラ!!」

「……えつ!?」

いつの間にか、対戦相手が鏡に映したような自分ではなく、最愛の人——海馬瀬人になっていた。

いや、目元のクマ、髪の分け目、指先などの、自分がモクバでなければ気づかないような違和感とこの状況から言つて、ドッペルゲンガーが化けた偽者だろう。

化けた理由は、なんてことはない。あのカードを使う為の演出らしい。

「手札から速攻魔法、『エネミーコントローラー』発動！　『未領域のサンダーバード』をリリースし、コマンド入力！　左！　右！　B！

A！　このコマンドによつて、『靈廟の守護者』は、俺のしもべとして使用することが出来る！」

ドッペルゲンガー／手札3枚→2枚

未領域のサンダーバード（リリース）

靈廟の守護者／守2500

（キサラの場→ドッペルゲンガーの場）

キサラは全く惑わされもときめきもないのだが、『靈廟の守護者』はあっさりと偽者に寝返つてしまつた。これでキサラを守るモンスターは居ない。

「攻撃力1900の『見習い魔嬢』で、ダイレクトアタッカークッ!!

ワーハツハツハ!!

見習い魔嬢／攻1900

《VS》

(直接攻撃)

キサラ LP 8000 → 6100

「うぐつ……！」

紫の光弾4発がキサラの周囲で炸裂し、まずまずのライフを削り取る。それでバトルフェイズは終了した。同時に黒い炎に偽者の海馬瀬人が包まれたかと思うと、代わって偽者のキサラが現れて、三文芝居も終了した。

「楽しんで頂けたかな？ 対戦相手に化けるのが本来のキャラだからアンタの姿に戻したんだけどさ」

「……70点つてところですね。あと個人的にイラッとしたので40点減点して赤点つてことで」

「えー、マジかよ。ブライド傷つくなあ。ああ、そういうえば芝居は終わつたけどお前から借りたモンスターは返さないからな？ メインフェイズ2にて、『見習い魔嬢』と『霊廟の守護者』でリンク召喚！』ステータス補助の『見習い魔嬢』と高ステータスの『未界域のサンダーバード』を犠牲にするだけあつて、それは強力なリンクモンスターだった。召喚条件は闇属性モンスター2体以上。

「未界域に遺されし、朽ち果ての斧から生まれた、叛逆の死徒！ 出でよリンク3！『幻影騎士団ラステイ・バルデッショ』!!」

見習い魔嬢（リンク素材）

霊廟の守護者（リンク素材）

幻影騎士団ラステイ・バルデッショ／攻2100

生前はさぞ屈強な勇士を使われていたであろう鎧と戦斧が、青白い靈魂で空虚な中身を埋めて自立していた。その強さも、錆び付いた斧の切れ味よりも靈魂の方にある。

「ラステイ・バルデッショの効果！ デッキから幻影騎士団のモンスターを墓地に送る。その後『ファンタム』魔法・罠カードをデッキからフィールドにセットする！ 僕は『幻影騎士団サイレントブースト』

を経由することで、『幻影霧剣』を2枚フィールドにセットする!』  
ラステイ・バルデツシユの効果で『幻影騎士団サイレントブーツ』を  
墓地に送つてから、『幻影霧剣』をセットする。その後墓地のサイレン  
トブーツを除外することで2枚目の『幻影霧剣』をサークルする、とい  
うコンボだった。

幻影騎士団サイレントブーツ（デッキ↓墓地↓除外）

幻影霧剣（1枚目）（デッキ↓場）

幻影霧剣（2枚目）（デッキ↓手札↓場）

「ターンを終了するぜ」

ドッペルゲンガーラP80000／手札2枚／伏せ2枚

幻影騎士団ラステイ・バルデツシユ／攻2100

未界域のビッグフット／攻3800  
→（装備）未界域捕獲作戦

## TURN 3 『拮抗勝負』

ドッペルゲンガー LP8000／手札2枚／伏せ2枚

幻影騎士団ラスティ・バルデッシュ／攻2100

未界域のビッグフット／攻3800

→（装備）未界域捕獲作戦

「まさかあのフィールドが壊滅させられるとは……」

「まあ力の差だよなあ？ 例えば見ろよ、このビッグフットを」

ターン開始時にはフィールドを制圧していたドラゴン達に代わり、いまフィールドに並ぶのはビッグフットを頂点とする未だ底知れぬ魔物たちだ。

『青眼の白龍』と同じ攻撃力でありながら遙かに出しやすく、装備魔法の効果で今や攻撃力3800を有し、トラップカード2枚で守られている。アルティメットにも引けを取らないぜ。これが、これから時代を制する“力”だ!!

自分のカードの強さを誇らしげに語るドッペルゲンガーだが、しかし――。

「それはどうでしようか？」

デュエルはまだまだ始まつたばかりである。

「確かにフィールドを壊滅させられたのは驚きましたが、この程度アルティメットを出すまでもないですよ。私のターン、ドロー！」

キサラ／手札4枚→5枚

「まずは、青き眼の賢士を通常召喚！」

青き眼の賢士／攻0

この勇ましき青年は2枚目であり、キサラのデッキにおいて最優先で通常召喚権を使いたいカードの1つだ。

ドッペルゲンガーはこれに対して動かない……というか動く意味がない。『幻影霧剣』をチエーン発動しても、『リンクリボル』の効果で逃げられてしまうだけだからである。

『青き眼の賢士』が召喚に成功した時の効果で『太古の白石』をサーキします！ これをコストに『調和の宝札』を発動！ 2枚の手札交

換です！」

太古の白石（デツキ→手札→墓地）

引いたカードは、十分満足できる内容だつた。

——宣言どおり、アルティメット無しで盤面を突破出来そうであつた。

「『コズミック・サイクロン』発動！ 1000 LPを払つて、伏せてある『幻影霧剣』を除外します！」

「チツ！ だがもう一枚残つてるぜ！」

キサラ LP 6500 → 5500 / 手札 5枚 → 4枚

幻影霧剣（伏せ→除外）

ライフは少し減つたが、墓地で発動する効果も持つ強力な罠『幻影霧剣』を宇宙の果てに排除した。これで1つ目の障害は攻略した。2つ目は——。

「墓地に眠る『青き眼の祭司』の効果を、自身を『デツキ』に戻すことで発動です！」

効果の対象になつた『青き眼の祭司』の背に、老司祭の魂が浮かび上がる。

『青き眼の祭司』は一族の長老！ 自身の魂を輪廻させ、戦場の命を捧げることで、龍の神を蘇らせる秘術を会得しています！ 『青き眼の賢士』を墓地に送り——

『青き眼の賢士』も、龍の神を信仰する一族の勇士である。躊躇なくその身を地に沈めた。そしてそれと入れ替わるように、

「蘇生召喚！ 龍の神の影——『白き靈龍』！」

攻撃力なら『青眼の白龍』が、妨害力なら『青眼の精靈龍』が勝つているが、2つ目の障害は『白き靈龍』でなければ突破出来なかつた。『白き靈龍』の特殊召喚成功時に効果発動！ フィールドの魔法・罠を1枚除外します！ 対象は2枚目の『幻影霧剣』です！

「……除外される前にチエーン発動して、『白き靈龍』の効果を無効にする！」

「チエーン3！ 『白き靈龍』を『青眼の白龍』に変身させつつ、『幻影霧剣』から逃がします！」

青き眼の祭司（墓地→デツキ）

青き眼の賢士（場→墓地）

白き靈龍（墓地→場→墓地）

青眼の白龍／攻3000

キサラ／手札4枚→3枚

幻影霧剣（場→除外）（対象不在）

神出鬼没な靈龍を捉えきれなかつた幻影騎士団の剣は、逆に白き光によつて靈魂を浄化されてしまつた。

これで2つ目の障害も攻略したが……。

「だが！ 未だビッグフットの攻撃力は3800！ ブルーアイズ達の攻撃力3000だでは倒せないぜ!?」

3つ目の障害は、単純な攻撃力対決。

だがキサラは軽く口角を上げてしまつた。瀬人がこの場にいても笑つただろう。

……『青眼の白龍』に攻撃力で喧嘩を売つて勝てると思つてているのが滑稽に見えてしまつた。

「装備魔法『光の導き』を発動！ 墓地から『青眼の白龍』を復活させて、『光の導き』を装備させます！」

青眼の白龍／攻3000（墓地→場）

→（装備）光の導き

キサラ／手札3枚→2枚

白き龍が2体並んでフィールドの一部を照らすが、ドツペルゲンガ一はあまり動じていない。

「だからソレじゃ攻撃力が足りないんだよなあ……。ラステイ・バルデツシユはやられるけど、次のターンでビッグフットの2回攻撃の餌食にしてやるよ。それともエクシーズでもするのかな？」

「あまりエクシーズに割く枠が取れなかつたのでやめておきます。ブルーアイズへの信頼と信仰だけで突破出来ますし！ フィールド魔法『光の靈堂』を発動！」

キサラ／手札2枚→1枚

ソリッドヴィジョンによつて、蒸し暑い熱帯雨林は上書きされて消

えていく。

換わりに世界を覆うのは、穢れ無き白亜の聖堂。石造りの冷たく清淨な屋内に暖かな陽光が射し込む、青き眼の一族の聖地。祈りを捧げる対象はもちろん、白き龍の神。

『光の靈堂』の効果発動！ デツキからドラゴン族通常モンスター1体を供物に捧げ、そのレベルに比例してフイールドのモンスター1体の攻撃力をターン終了まで強化します！

デツキからレベル8『青眼の白龍』を墓地に送ることで、フイールドの『青眼の白龍

』の攻撃力を800上昇させます！』

青眼の白龍（デツキ→墓地）

青眼の白龍／攻3000↓／攻3800

→（装備）光の導き

靈堂内に満ちた光を吸収し、『青眼の白龍』の身体が神秘的に輝く。更にその輝きの中から、2体の龍——『青眼の精霊龍』と『白き靈龍』の輪郭が現出した。

「装備魔法『光の導き』には、装備モンスター以外攻撃出来ない代わりに、墓地に眠るブルーアイズモンスターの数まで装備モンスターの攻撃を可能にする効果があります！ いま墓地にあるのは『白き靈龍』と『青眼の白龍』と『青眼の精霊龍』の3体！ よって3回攻撃できます！」

『ビッグフットと同じ攻撃力で3回攻撃だと!?』

「……ちなみに、相討ちにするつもりはありませんので！」

墓地にはドラゴン族の破壊を肩代わりする『復活の福音』があつた。後の展開に向けて温存する手もあつたが……。

『キサラ！ このまではお前の『青眼の白龍』が戦闘破壊されることになるぞ！ 早く選ぶがいい！ 『スキル・サクセサー』を使うか、否か！』

『俺なら間違いなく『スキル・サクセサー』を使っていた！ ブルーアイズを守れるなら、罠カードの1枚や2枚など惜しむものか！ そんな計算で、そんな心で——ブルーアイズを従えて俺を倒すだと？ 甘

い!!』

(まあ、あのときと状況は違いますが……。ただの慎重論でブルーアイズを死なせるよりはいいでしょー!)

「バトルフェイズです!」

フィールドで2つの光のカードの力を宿した『青眼の白龍』と、その光が呼び寄せた2体の龍が、口腔に光を蓄える。これこそ『デュエルモンスター』ズ創世記から薈れ高き――。

「滅びのホーリー・バーストストリーム!

三・連・弾!!」

青眼の白龍／攻3800（1回目）

《VS》

幻影騎士団ラステイ・バルデッショ／攻2100  
(戦闘破壊)

青眼の白龍／攻3800（2回目）  
(復活の福音で戦闘破壊を肩代わり)

《VS》

未界域のビッグフット／攻3800  
(戦闘破壊)

青眼の白龍／攻3800

《VS》

(直接攻撃)

ドツペルゲンガー

LP80000→63000→2500

第一砲が戦斧に宿つた闇を消し去り、第二砲はビッグフットと激突したときに爆風を起こし、その爆風を搔い潜つた第三砲がドツペルゲンガーに直撃した。ここまで約7秒。

「うおおおおおお——ツ!?」

衝撃的な戦闘ダメージで、ドツペルゲンガーがキサラと同じ身体には似合わない派手な吹き飛び方をする。

「まだ2500もライフが残つてゐるのに、演出過剰です! メインフェイズ2に――

「拮抗勝負」

「……。えつ……？」

TURN3—4 ≪No. 77 The Seven  
Sins≫

「まだ2500もライフが残つてゐるのに、演出過剰です！ メインフェイズ2に——」

「拮抗勝負」

「…………えつ…………？」

派手な吹つ飛び方だった。堂に入つた迫真の演技だつた。そう――本当に演技でしかなかつたのだ。

「ククク……アーハッハッハ!! その通り！ 吹つ飛び名演技を楽しんでもらつたところで……次は残りLP2500からの逆転劇の演目を愉しんでもらうぜ！ 自分フィールドが空っぽなら手札からも発動出来る罠カードさ！ バトルフェイズ終了時に発動するカードだから、メインフェイズ2に入る前に処理してくれよオ？」

キサラの顔筋では出来ないであろう愉悦の表情で、ドッペルゲンガーは『拮抗勝負』のカードを見せつける。

フィールドのカードの枚数がイーブンになるように優勢側が自分のカードを裏側で除外するカードだ。ドッペルゲンガー側は『拮抗勝負』1枚しかフィールドに無いため、キサラも1枚だけ残して、他は全て除外しなければならない。

自分の手で選んで、除外しなければならないのだ――。

「う……うぐ……」

最も信頼するカードを残した、と理由付けがしたかった。

だが実際には「他に選択肢がない」だけではないかと、彼女は考えてしまう。

故郷での思い出を元に作つたカードも、半身たる龍も自分の手で除外などしたくはなかつたが――。

「……『青眼の白龍』を1体残して、他は全て除外します……」

ドッペルゲンガー／手札2枚→1枚  
光の靈堂（場→裏側除外）

青眼の白龍／攻3800（場→裏側除外）

→光の導き（場→裏側除外）

フィールド魔法の崩壊によつて『光の靈堂』のテクスチャーも、落としたパズルのように、蹂躪される民家の壁のように碎け散つてしまつた。

儂く飛んでいく欠片を見て思い出すのは、戦争で失つた故郷の一。

（ツ！たかがフィールド魔法を失つた程度で、余計なことを考えていは駄目！今はデュエルに集中しないと！）

「メインフェイズ2で、カードを1枚伏せます。墓地の『太古の白石』の自身を除外して発動する効果で『青眼の白龍』を回収し、エンドフェイズには第1効果で『白き靈龍』をデッキから特殊召喚します。これで、ターンエンド、です……」

青眼の白龍（墓地→手札）

キサラLP5100／手札1枚／伏せ1枚

白き靈龍／攻2500（デッキ→場）

青眼の白龍／攻3000

彼女の戸惑いと後悔は、偽者を大いに勢いづかせた。

「俺のターン、ドロー！『強欲で貪欲な壺』で、デッキトップを10枚除外して更に2枚ドロー！」

ドッペルゲンガー／手札1→2→3枚

「俺も手札交換カード『トレード・イン』発動！そしてお前と同じく、コストとして捨てられたモンスターの効果発動！『未界域のオゴポゴ』！再びデッキから『未界域調査報告』を墓地へ送る！」

未界域のオゴポゴ（手札→墓地）

未界域調査報告（デッキ→墓地）

手札を2枚入れ換えたが、まだまだ引き足りないらしい。

『終わりの始まり』だ！いま墓地には闇属性モンスターが10体いるから条件は満たしている！その内5体を除外して3枚ドロー!!

ドッペルゲンガー／手札3枚→5枚

ドッペルゲンガーが除外したカード

『未界域のネッシー』

『未界域のオゴポゴ』

『未界域のワーウルフ』

『未界域のチュパカブラ』

『クリツタ』

「またドロー!? なんてデツキ圧縮力……！」

凄まじいデツキ圧縮は、本来なら気合いで引くしかないような力！  
ドすら手札に引き込ませる。例えば、神のような――。

『手札から闇の創造神、『ダーク・クリエイター』を特殊召喚するぜ！

この神は、自分フィールドに魔物がいないにも関わらず、墓地に闇の魔物が5体以上埋葬されていれば手札から姿を顯す！』

ドツペルゲンガー／手札5枚→4枚

ダーク・クリエイター／攻2300（手札→場）

カードから溢れた闇が、黄昏色の翼を持つ黒鉄の巨人を組み上げた。命無き世界にこそ降臨するこの神は、闇の力で以て世界を再生する力を持つている。

「これから、フィールドを賑やかにしてやるぜ！ 手札の『未界域のチュパカブラ』と、墓地の『未界域調査報告』でコンボ！ さらにフィールドの『ダーク・クリエイター』が墓地から『未界域のチュパカブラ』を除外することで発動する権能！ これにより、手札枚数を減らさずに『未界域のビッグフット』と『幻影騎士団ラステイ・バルデツシユ』が復活だ!!』

『未界域のチュパカブラ』の、身体はビッグフットを蘇らせる肉となり、靈魂は『ダーク・クリエイター』を通して『幻影騎士団ラステイ・バルデツシユ』へと受け継がれた。

未界域のチュパカブラ（手札→墓地→除外）

未界域調査報告（墓地→デツキ）

未界域のビッグフット／攻3000（墓地→場）

幻影騎士団ラステイ・バルデツシユ／攻2100（墓地→場）

ドツペルゲンガー／手札4枚→3枚→4枚

「くつ……。しかし『青眼の白龍』と匹敵する攻撃力を持っているの

は、ビッグフットだけでしよう……?』

攻撃力だけでマウントを取ろうとするなど、所詮強がりに過ぎない。張り合ったキサラ自身それは分かっているのだが、ドッペルゲンガーは意外にも乗ってきた。

『なら次はコイツを出すぜ。お前の『青眼の白龍』と全く同じステータスを持つコイツをな！ 墓地から光と闇の二兎を除外！』

墓地から闇属性の『未界域のジャツカロープ』と光属性の『幽鬼うさぎ』の魂魄が飛び出し、混沌の渦を描く。

『二兎を追う人の世の獸性が、未だ開かれざる界域に、開闢の斬撃をもたらす！ いでよ、『カオス・ソルジャー——開闢の使者——』!!』

カオス・ソルジャー——開闢の使者——／攻3000

ドッペルゲンガー／手札4枚→3枚

B・W・Dと並ぶ攻撃力の剣と守備力の防具を輝かせる、デュエルモンスターズ界最強剣士の一角である。これでドッペルゲンガーのフィールドは4つ埋まつたが、どうやら最後の席も埋めたいらしい。

『精神操作』発動！ 『青眼の白龍』を頂くぜ！』

ドッペルゲンガー／手札3枚→2枚

青眼の白龍／攻3000（キサラの場→ドッペルゲンガーの場）

「うつ……」

ブルーアイズのコントロールが移ると同時に、キサラの足元がふらつく。端から見れば劣勢になつたのが原因のようだが、單にそれだけではない。1つには『キサラ』と『青眼の白龍』の繋がり故に、一瞬『精神操作』の影響を受けたこと。

そしてもう1つは、またしても過去の経験のフラッシュバック。破かれた身体と魂をパラドックスにサルベージされ、それを壊してから組み直され、歴史を消し去る手駒の1つになり、最終手段として操られる手駒などでは言い訳のつかないことを――。

（ち、違う！ 操られてなどいない！ 操られなどしない！）

「おいおい体調不良か？ そのまま負けてくれても良かつたんだが」「つ、何も問題ありません。戦況も体調もね」

キサラは両の足をもう一度踏み立て直すが、だからこそ追撃が続い

てしまう。

「せつかくブルーアイズを奪つたが、『精神操作』のデメリットで攻撃が出来ねえな。少々勿体無いが素材にさせてもらう！ レベル8モンスター2体でエクシーズ召喚！」

『未界域のビッグフット』と『青眼の白龍』2つの光球——オーバーレイユニットに変質する。光球の軌跡が描き導くエクシーズモンスターは……。

「未だ知られざる神威を、絶槍に宿せ！ エクシーズ召喚、ランク8！  
『宵星の機神（シーオルフェゴール）デインギルス』!!」

宵星の機神デインギルス／攻2600

青眼の白龍（エクシーズ素材）

未界域のビッグフット（エクシーズ素材）

脚は機馬、左右の腕に巨大な槍と盾を備え、黒鉄と金光で形成された機士が召喚された。『青眼の白龍』は、無機質なオーバーレイユニットとしてデインギルスの周囲を一定の軌道で公転しているが、デインギルスはそんなものを消費せずとも強力な効果が使える。

『宵星の機神デインギルス』が特殊召喚された場合に、ノーコストで2種類の効果から片方を発動できる！

1つは除外されている自分の機械族をオーバーレイユニットとして回収する効果で、これは状況的にもデッキ的にも使う必要がない。だがもう1つは違う。

「俺は、相手フィールドのカード1枚を選んで墓地へ送る効果を発動！ 逃げたいなら『白き霊龍』の効果でサクリファイス・エスケープしてもいいぜ！」

「対象を取らない効果だから逃げようがないでしょう！ 分かつてて発動したクセに……！」

デインギルスの槍が地面を突き刺すと、離れたキサラのフィールドに黒の大穴が開き、『白き霊龍』を吸い込んでしまった。

白き霊龍（場→墓地）

これでキサラの場はガラ空き、かに見えたが。

「ドラゴン族が効果によつてフィールドから墓地に送られたので、墓

地から『靈廟の守護者』を特殊召喚します！ さらに前のターン同様、追加効果も使用します！』

靈廟の守護者／守2100（墓地→場）

白き靈龍（墓地→手札）

キサラ／手札1枚→2枚

再び壁モンスターとして『靈廟の守護者』がキサラの場に現れる。だがドツペルゲンガーはバトルフェイズでそれを相手にする気はないらしい。

「壁は残さないぜ！ 僕は、闇属性ランク8である『宵星の機神デインギルス』1体をセルフランクアップさせる！ エクシーズ召喚!!』

デインギルスの巨体が、その周囲を舞っていたオーバーレイユニットと同じ光球となり、3つの輝きが激突して弾ける。その衝撃で広がった銀河の中心に形成されたのは――。

「現れろ、ランク11！ 罪の重さを量る、激痛の糸！ 『N.O. 84ペイン・ゲイナー』！」

N.O. 84ペイン・ゲイナー／守0→2200

(ORU3)

見た分には攻守共に0で、大きさもクリボー程度しかない小蜘蛛だった。しかしキサラはその強さと価値を知っている。

「ナンバーズ！ そんなレアカードまでデッキに入れていたなんて……！」

ナンバーズとは、1種類につき3枚で百種類あまり、世界に五百枚とないレアカードだ。レアリティだけなら『青眼の白龍』に匹敵する。効果は個々のナンバーズによつて相当ムラがあるが、ペインゲイナーはかなり強力な部類で、自身と守備力対決で負けている相手モンスターを全て破壊するというものだ。しかし今回は使う必要はないらしい。

『『靈廟の守護者』はペイン・ゲイナーの効果でも始末出来るが……。『ラステイ・バルデツシユ』の誘発効果発動！ 自身のリンク先に闇属性エクシーズモンスターが降り立つた場合、フィールドのカード1枚を選択して破壊する！

死して未界域に忠誠誓いし、騎士の斬撃を受けろ！」

『ペイン・ガイナー』からエネルギーの供給を受けた戦斧が青白く光り、それを振り下ろすと斬撃が『靈廟の守護者』に向けて放たれ、それを切り裂いた。

靈廟の守護者／守2100（破壊）

だが、『N.O. 84』は、ただの除去能力を持つた攻撃力0ではない。「とてもないレアカードが必要」という下準備さえ整えれば発揮される力があるので。

「壁さえ消せれば攻撃力0なんぞ要らん!『NO.84ベイン・ケイナー』をセルフランクアップ!エクシーズ召喚!!」

ペインガイナーが半透明となつて巨大化していく。体が大きくなるにしたがつて、爪は鋭く、八脚は長く、体表は硬くなつていく。ものはやそれは小蜘蛛などではなく、大地の神にも匹敵する巨体――。「現れろ! 人の世の、罪と獸性と欲望が紡ぐ闇黒の使徒! 『N.O. 77 The Seven Sins』!!」

No. 77 The Seven Sins 攻4000  
「2体目のナンバーズ！ The Seven ...『Sin』  
ORU4)

前にも、こんなことがあつたと、キサラは追憶する。

『同志は一人でも多くほしかつたのだが、やむを得まい。やはり君も、他のカード同様、私の下僕となつてもらおう』

『この仮面を身につけた者は、『罪の意識』が増幅される。やがては『罪の意識』によつて自我が壊され、『罪を清算してよりよく生きる』ことしか考えられなくなる。そんな状態になつた君に、私が『罪を清算する道』を示せばどうなると思う？ フフフ……。君は私の下僕になるという訳だ――』

歴史の闇に潜む罪を司る者に押し潰され、書き換えられ、操られた。

『あの女も囚人かあ?』

『どうでもいいぜ。女でありや何でもよ……！』

『……』に入ってきた以上好きにしていいってことだぜ……！』

もつともつと前には、地下闘技場で、悪鬼のごとき魔物と、蜘蛛糸を操る魔物に襲われた。

そしていま再び、身のすくむような闇と混沌と魔物の攻撃を受ける。かつて自分を救ってくれた人は、いまここにはいないというのに。

「バトルフェイズ！　4体のモンスター……。それも、開闢の2回攻撃を含めれば総攻撃力14000以上！　もう絶対に防げまい！　まずは『ダーク・クリエイター』で攻撃！」

キサラの残りLPは5500。全ての直撃すれば受けきれない。

だから最後の手として、墓地から効果を使う。

「だ、ダイレクトアタック宣言時に……！　墓地から、く、『クリアクリボー』を除外して効果発動です！」

墓地から飛び出したクリアクリボーの身体が光り弾けて、キサラの足元に魔法陣を敷く。

「相手の直接攻撃に対し、デッキから1枚ドローして対抗します！　そしてモンスターカードを引けば、直接攻撃の代わりにそのモンスターとバトルさせることができます！」

「お前それでモンスターカードを引いただけじゃ生き残れないって分かってるよな？」

墓地のカードは公開情報だ。ドッペルゲンガーは折り込み済みで攻撃しているし、『クリアクリボー』の効果で何を引かれようが勝てるつもりでいる。

「モンスターカードを引いて特殊召喚したところで、受け流せるダメージはたかが知れる。万が一このターン生き残つても、次の俺のターンには、開闢の剣、闇の神槍、大罪の糸、靈騎士の斧という4通りの除去手段がある上に、『N o . 7 7 T h e S e v e n S i n s』には破壊耐性もある。もうどうにもならないぜ？」

「わ、私は……」

咄嗟に言い返せない。

何を引けば生き残れるか、わからない。

魔法の呪文ではあるまいし、いまここで何か唱えれば良いカードが

引けるという筈もない。

『あの人』なら、自信を持つて力強くカードを引いただろうが、自分にはそんな強さはない、とキサラは思う。

それでも――。

(まだ……生きたい……。弱くても、この夢の未来で……!)

そんな最後の希望を振り絞り、手を伸ばした。

「ツ、ドロー!」

## TURN 4—5 「罪と神と真」

(まだ……生きたい……。 弱くとも、この夢の未来で……！)

そんな最後の希望を振り絞り、手を伸ばした。

「ツ、ドロー！」

キサラに新たな1枚をもたらしたことで、役目を終えた「クリアクリボー」の効果による魔法陣は消える。そして引き当てたカードを見て悟る。

本物のキサラの正体を。

今自分の在り方を。

嗚呼。デツキが応えてくれるとは、こういうことだつたのか――！  
「モンスターを特殊召喚して、強制戦闘に入ります！」

「は。どうせ下らない壁モンスターによる悪足掻き……。消し飛ばせ、『ダーク・クリエイター』!!」

暗黒の雷が矢の雨のようにキサラに迫り――。

フィールドが、一際『白く』輝いた。

「悪足掻き？ そんなものは弱者や敗者がすること。私はそんな無様な姿は晒しません！」

「な、に……？」

「誇り高く威光を放ち、強靭・無敵・最強であり続けること。それが私の在り方！ デツキが教えてくれた私のロード!! 私が特殊召喚していたのは――『青き眼の乙女』!!」

闇の攻撃を掻き消す純白の中から、キサラと同じ銀髪青眼の女性が姿を現す。その強い祈りと魔力は、大いなる守りの力となる。

青き眼の乙女／攻0

『青き眼の乙女』が攻撃対象にされたときの効果発動！ 自身の表示形式を変更して、攻撃を無効にします！

『クリアクリボー』の効果で始まつた戦闘でもその効果使えるのかよ！？

「効果にはまだ！ 龍の力を呼び覚ます続きがあります！ 手札から

出でよ、『青眼の白龍』!!

青き眼の乙女／攻0↓／守0

青眼の白龍／攻3000（手札→場）

《V S》

ダーク・クリエイター／攻2300（攻撃無効）

キサラ／手札2枚↓1枚

キサラのカードと、『青き眼の乙女』の魔力が解き放つた白き龍は、堂々たる攻撃表示でフィールドに降り立つた。

「何が『堂々たる攻撃表示』だ！『The Seven Sins』に攻撃力で負けてるクセに！『未領域のビッグフット』より余程出しづらいモンスターのクセに！」

だが、開闢の使者の2回攻撃まで計算に入れれば、これで正しい。クリアクリボ一、青き眼の乙女、青眼の白龍、リンクリボ一。4枚のカードが合わさり、闇の脅威に抗う力となつた。

『幻影騎士団ラステイ・バルデツシユ』で攻撃！』

『青き眼の乙女』が『リンクリボ一』の為に墓地へ逝き、『リンクリボ一』が攻撃を無力化する為に墓地へ逝く。その斬撃は通らない。

青き眼の乙女／守0（リリース）

リンクリボ一／攻300（墓地→場→墓地）

《V S》

幻影騎士団ラステイ・バルデツシユ／攻2100↓／攻0

（攻撃キャンセル）

『No. 77 The Seven Sins』で、『青眼の白龍』を

攻撃！』

キサラと『青眼の白龍』の両手両脚が蜘蛛糸に絡め取られ、身動きを封じられる。まるで罠に嵌まつた蝶や、蝶にされた罪人のように見えるが、女と龍の表情は毅然としていた。

ドツペルゲンガーにはそれが気に入らない。生意氣なる相手の胴を貫く、その砲撃の名は——。

「七罪導く刺殺磔刑（セブンス・ロード・パニッシュメント）!!」

No. 77 The Seven Sins／攻4000

## 《V S》

青眼の白龍／攻3000（戦闘破壊）  
キサラ LP5500→4500

「ぐうつ……！」

超圧縮された、槍を思わせる程鋭い暗黒の光線。龍の胸に風穴が空き、彼女の心臓にまでヴィジョンが貫通する。

否、ただのヴィジョンでは済まなかつた。『青眼の白龍』の魔力を取り込み、『青眼の白龍』に匹敵する希少性あるナンバーズの、『青眼の白龍』を破壊する攻撃。しかも神と攻撃力は互角で、罪の名を冠している。偶然とてこれだけ重なれば、靈的な意味でのキサラの魂魄にすら、身体が2つに裂けるような激痛を、体表が溶けるような損壊を響かせる。

それでも――。

「まだ……。まだ闘えます!!」

攻撃と共に磔が終わつて墜とされても、膝と右手で最低限の着地をこなす。無様な姿は決して晒さない。

ならばと、今度は開闢の使者による追撃が繰り出される。

「カオスブレード!!」

カオス・ソルジャー——開闢の使者——／攻3000

## 《V S》

(直接攻撃)

キサラ LP4500→1500

地面を斬り裂きながら疾走る衝撃は、まさしく『滅びの爆裂疾風弾』と互角の威力。それがキサラの身体に直撃し、激しい光の柱をあげる。

「く、ああああああ――！」

それでもなお、倒れることはなく。

「トドメだ！ 開闢の使者には2回攻撃が――」

「いいえ……いいえ！ 出鱈目を言わないでください！ 開闢の使者の2回攻撃は、『魔物』を斬つたときのみ！ 私という『人間』を斬つても、2回攻撃は出来ません!!」

「チイ……！」

理を曲げたドッペルゲンガーの脅しにも屈しない。

「仕留めきれなかつたのは悔しいが……。カードを1枚伏せて、さうに必殺のモンスターカードも裏側で出しておく！ ターン終了！」

ドッペルLP2500／手札なし／伏せ1枚

カオス・ソルジャー——開闢の使者——／攻3000

N O . 77 The Seven Sins／攻4000 (ORU

3)

幻影騎士団ラステイ・バルデッシュ／攻2100

ダーク・クリエイター／攻2300

裏側守備（メタモルポット）

「……なあ。お前、ノリが悪くねえか？」

『クリッター』で手札に加えていた、5枚ものドローを可能にするモンスター『メタモルポット』を伏せながら、偽者は本物に対する優位点を探す。

「こつちが最強のモンスター軍団で怒濤の攻撃を仕掛けたのに、吹っ飛びもしないし倒れもしない。倒しがいがねえんだよ！」

「別に。あなたの、サンドバッグや踏み台になる為に闘つてる訳ではないですしどうも。もつと辛い目になど、幾らでも、遭っていますからね……」

肩で息をしながら、本物は本物が辿った軌跡を追想する。

「戦争で父と故郷を喪い。母と共に逃げた異国之地で流浪の果てに、盗賊に襲われて母を喪いました」

「5年以上の難民生活で、物や罵声を投げつけられたこと、飢え死にしかけたことなど何度あつたことか……」

「本当に死んだときは、拷問が原因でしたね。その数千年後には、愛する人の手で身体を二つに裂かれて2度目の死を迎えました」

「その後無理矢理生き返らされてまた拷問。世界を滅ぼすための下僕として使役される羽目になつたり……」

嘘偽りなき独白なれど、それは偽者を惑わせるに十分なものだつた。

「お前は……。お前は、いつたい何者なんだ……？」

「このデュエルが終われば分かることですよ」

「じゃあ次の、俺のターンで分かるな？」

ドッペルゲンガーのターンになれば、『カオス・ソルジャー——開闢の使者』による、モンスター1体の除外。

『N.O. 77 The Seven Sins』による、特殊召喚された相手モンスターの全体除外。

『ダーク・クリエイター』の効果で『宵星の機神デインギルス』を蘇生することによる、対象に取らず破壊も介さない除去。

『宵星の機神デインギルス』の蘇生先が『幻影騎士団ラステイ・バルデツシユ』のリンク先なら、破壊効果が飛んでくる。キサラの敗北で決着がつくだろう。

それ以外の選択肢があるとするならば——。

「この、私のターンで分かるようにします！ ドロー！」

キサラ／手札1枚→2枚

『白き靈龍』をコストに、『トレード・イン』、発動！

生きようとする意志と覚悟、本物の誇りと強さが最高の1枚を呼び寄せ、死に札2枚が命を宿した2枚に生まれ変わる。

それでもなお——あと1枚、足りなかつた。勝利への道は繋がらない。

ならばこそ突き進むのみ、届かざるあと1枚の輝きに手を伸ばす——

！

「永続魔法『ブリリアント・フュージョン』、発動！」

「ここでデッキ融合か……」

『ジェムナイト・ラズリー』と『太古の白石』で、ジェムナイトモンスターのデッキ融合！『ジェムナイト・セラファイ』！『ジェムナイト・ラズリー』が効果で墓地へ送られた場合、墓地の通常モンスターを手札に加えられます！

ジェムナイト・ラズリー（デッキ→墓地）

太古の白石（デッキ→墓地）

青眼の白龍（墓地→手札）

ジエムナイト・セラファイ／攻2300→0

白と瑠璃を含む3つの輝きは、龍と天使の翼をもたらした。そして龍の命は再び輪廻する。

『青眼の白龍』をコストに、2枚目の『トレード・イン』！ コストにした『青眼の白龍』は、墓地から『太古の白石』を除外することで再び回収！

「ま、まだと!?」

太古の白石（墓地→除外）

青眼の白龍（墓地→手札）

キサラ／手札2枚→3枚

そして宝石の天使『ジエムナイト・セラファイ』が翼を広げるとき、新たな召喚劇が始まる。

『ジエムナイト・セラファイ』の効果による通常召喚！ 『青き眼の祭司』！ その効果で『青き眼の賢士』を墓地から手札に呼び戻して、そのまま召喚！ その効果で2枚目の『エフェクト・ヴェーラー』をデッキから手札に呼び寄せます！

青き眼の祭司／攻0

青き眼の賢士／攻0（墓地→手札→場）

エフェクト・ヴェーラー（デッキ→手札）

天使の左右に青き眼の一族が降り立つが、ドツペルゲンガーはまだ動こうとしない。故にキサラのデュエルは加速する。

『レベル5の『ジエムナイト・セラファイ』に、レベル1チユーナー『青き眼の祭司』をチューニング！』

6つの星を繋ぐシンクロ召喚。それが終わるよりも早く、祭司は次の仕事に取りかかる。

「さらに、残った『青き眼の賢士』をコストに、墓地から『青き眼の祭司』の効果発動！ 墓地からモンスターを復活させます！」

人と龍で命の交換が行われる。かくして7つの星は2体の龍に生まれ変わった。

「シンクロ召喚！ レベル6、最強の融合呪印生物——『ドロドロゴン』！」

さらに蘇生召喚！『白き霊龍』！」

ジエムナイト・セラファイ（シンクロ素材）

青き眼の祭司（場→墓地→デッキ）

青き眼の賢士（場→墓地）

ドロドロゴン／守2200

白き霊龍／守2000

現れたのは、澄んだ靈氣の龍と、濁った沼の龍。対象的な2匹のうち、先に効果を使ったのは霊龍のほうだった。

『白き霊龍』の効果で、あなたの伏せカードを除外します！

「……どうせまた逃げられるだろうが、一応使っておく！ 3枚目の『幻影霧剣』！ モンスター1体はミスト化し、攻撃出来ず、攻撃されず、効果は無効化されるぜ！」

そう、逃げることが可能なのだ。この『幻影霧剣』にチエーンして、『白き霊龍』をサクリファイス・エスケープさせれば、『幻影霧剣』の除外は成功する。

しかし。

「……あいにく、逃げませんよ？」

「なに……？」

罠カードの呪いで、白き霊龍の透けた身体が更に霞む。相手のカードを除外する光を放つだけの実体を保てていない。

だがこれでいい。リバースカードの正体は暴かれた。止められる心配がなくなつたなら、あとは一步踏み出すだけなのだ。

「これが最後の賭け！ 墓地から『シャツフル・リボーン』を除外して効果発動です！ フィールドに残つた『ブリリアント・フュージョン』をデッキに戻して、1枚ドローします！」

このドローに全てが懸かっている。ここで「あのカード」を引き損なえば、罪深い敗北に圧し潰されるだろう。

だがキサラに怖れはなかつた。

（あの人、あのデュエルに比べれば！）

『瀬人！ お前は第三の選択肢を！ お前とキサラが共に歩む未来を示すと言つたな！ この絶望を前に、何を示せるというのだ!!』

(この程度!)

敵は数こそ多いが、せいぜい攻撃力4000。

手元のブルーアイズは、ゼロではない。

相対する者に、気遣う必要もない。

そう、これは——。

「ただ勝てばいい決闘なのですから!!」

その風の鋭さ、その光の輝きは、鞘から抜かれた名剣の如く。青き眼と共鳴した魔力が、召喚を行う前から逆って敵を斬る。

そのカードにはテキストこそあれど、イラストがなかつた。いや或いは——『最初からこのデュエルフィールドに居たのかもしれない』。「わた——、このカードは、オリジナルの力を借りた場合に、手札から特殊召喚できます！ もつとも、『以前のように』『デッキから除外する』必要はありませんがね。手札からオリジナルを見せつけるだけで良いのです！」

「いつたい……何を……！」

キサラが見せつけたのは、本物の『青眼の白龍』。偽者には、キサラの意味深な言葉の意味は分からず、その魔力がもたらす風も光も真似できない。

「究極の一択の果て、第三の決断に救われた第四の光——今ここに解放します！」

魔力は流れる。決闘者からカードへ。カードからデイスクへ。デイスクから——ファイールドに現れる龍へ！

デッキに3枚しか入れられないカードの名は名乗れない。一度闇に墮ちた過去は変わらない。故にこう名乗る——！

「ブルーアイズ！ オルタナティブ・ホワイト・ドラゴン!!」

ブリリアント・フェージョン（場→デッキ）  
シャツフルリボーン（墓地→除外）

青眼の亜白龍／攻3000（手札→場）  
キサラ手札3枚↓4枚↓3枚

一度は引き裂かれた身体の繋ぐのは、罪の鎧ではなく、血脉のように広がる光の筋。原点にして頂点たる通常モンスターにはもう戻れ

ないが、攻撃的な身体と能力を備えて生まれ変わった、未来を生きる白き龍の姿だつた。

『オルタナティブ』——だと!? 馬鹿な！『影』なら分かる！『進化系』でも分かる！だがコイツは何だ!? 世界に3枚しか存在しない『青眼の白龍』の同位体なぞ、いくら海馬瀬人やペガサスでも、そう簡単に用意出来るはずがねえ！

「そりやあもう……。大変でしたよ？ でも貴方に教える義理はありません。『白き靈龍』をリリースして効果発動！ 先ほど見せつけたオリジナルの方を特殊召喚！」

『幻影霧剣』は屍には干渉出来ない。靈体の龍はその身を墓場に捧げることで霧の呪縛を振り払い、実体の龍に転生した。

白き靈龍（場→墓地）

青眼の白龍／攻3000（手札→場）

キサラ手札3枚→2枚

頭数の劣勢、数値上の敗北を、勝利をもたらす龍は易々と覆す。『魔法カード』『滅びの爆裂疾風弾』！『青眼の白龍』の単体攻撃を、相手フィールド全体への効果破壊に変化させます！

「それでも『The Seven Sins』は落とせねえぜ！ こいつはオーバーレイユニットを身代わりにすれば破壊されない！」

「……ならばもう一発！」

「なに……？」

「オルタナティブの効果！」

もう通常モンスターではない代わりに、その龍は、彼女は、只の出しやすい攻撃力3000であること以上の破壊力を身に付けていた。「攻撃を制限するという意味では『以前と同じ』ですが……。『今の効果は』、自身の攻撃宣言を放棄する代わりに、相手モンスター1体を効果で破壊する、というものですね！」

2体の龍が口腔に光を蓄える。それが解き放たれればどのような破壊力を生むかは、すぐに分かることとなる。

「行きます！ 滅びの——爆裂疾風連弾（バーストストリーム・オルタナティブ）!!」

爆風の波が連なり、薙ぎ倒していく。見えざる守備モンスターも、開闢の剣闘士も、戦斧に宿る騎士の靈も、闇の創造神も、大罪の悪魔を守護していた——神威の絶槍と、未界域にて最強の剛腕も！

N o . 77 The Seven Sins (ORU4↓3↓2)

カオス・ソルジャー——開闢の使者——（破壊）

幻影騎士団ラステイ・バルデッシュ（破壊）

ダーク・クリエイター（破壊）

メタモルポット（破壊）

「ぐ……！『The Seven Sins』以外全滅……！だが『The Seven Sins』には！ オーバーレイユニットが2つ残っているぜ……！」

オーバーレイユニットとして『青眼の白龍』と『N o . 84ペイン・ゲイナー』を残している。オーバーレイユニットの残数に拘るのは、次のターンに『The Seven Sins』の効果を発動するのにオーバーレイユニットが2つ必要だからだ。

もつとも、キサラに言わせれば。

「このバトルフェイズで終わらせます！『ドロドロゴン』の効果発動！自身を含む融合素材をフィールドから墓地へ送つて、融合召喚を行います！」

「はあ？ そんなあべこべな素材で何を……」

「最強の融合呪印生物たる『ドロドロゴン』よ！ いま最もふさわしい姿に、その身を変えよ！」

『ドロドロゴン』を構成するヘドロが、或いは硬質化し、或いは流れ落ち、1つの芸術品を造形する。それは、海馬瀬人が愛してやまない至高の芸術。

「青眼の白龍だと！」

「さらに！『青眼の亜白龍』は、フィールドか墓地にいる間は『青眼の白龍』として扱います！ まあ、元々は青眼の白龍だつたのですから』、当然ですよね？」

「てことは、まさか！」

「そうです、青眼三体融合！」

光の渦の中で1つになつていく3体の龍を見届けながら、「そういえば、三体融合も良いことばかりではなかつたな」とキサラは思い返す。

『マンモスの墓場』と融合させられたり、結局負けてしまつたり……。

——自分とパラドックスとS·i·nトウルース・ドラゴンで、三位一体にさせられたり。

あの記憶と因子は、まだ彼女の中に残つていた。これから喚び出す竜は、それを元に生まれたカードだ。その証拠に、名前は一文字貰つたし、腕と翼が一体となつた造形などそつくりだ。

だが、もう罪深き世界には飲まれない。真実は自分の眼で見極める。だから真実の名は冠していても、罪（S·i·n）とはもう名乗らない。今と未来では、こう名乗る――！

「罪深き過去を乗り越えて、真の未来を生きる光の龍！　いま征きます！」

ネオ・ブルーアイズ・アルティメットドラゴン!!

真青眼の究極竜／攻4500

ドロドロゴン（場→墓地）

青眼の白龍（場→墓地）

青眼の亜白龍（場→墓地）

『青眼の究極竜』の神秘性と生命力に、さらに未来技術の機光装甲を融合させた、最強の三ツ首竜が姿を現した。

「バトルフェイズ！　『真青眼の究極竜』で『N·o·77 The S even Sins』に攻撃！」

かつての『青眼の究極竜』が、3つの首の力を1つに束ねて攻撃を編み出していたのに対し、『真青眼の究極竜』は、中央の首一本で推進力・貫通力のある光の集束を完了した。それはもはやアルティメット・バーストではなく。

「強靭なるアルティメット・バースト！　オーバーレイユニットにされたブルーアイズは、返してもらいます！」

さらにリバースカード『禁じられた聖衣』で、『N·o·77 The

Seven Sins』の攻撃力を下げます！」

「まだだ……。まだ返す気はない！『ペイン・ゲイナー』よ、『The Seven Sins』を守れ！」

『The Seven Sins』の前に、今までオーバーレイユニットだった『ペイン・ゲイナー』が姿を現し、小さな身体から健気に蜘蛛糸を広げて攻撃を防いだ。とはいってもダメージは防げていないのだが。

真青眼の究極竜／攻4500

《V.S》

No.	77	The Seven Sins／攻4000→3400
-----	----	---------------------------

(ORU<sub>2↓1</sub>)

ドッペルゲンガー LP2500→1400

「ぐ……！ついにオーバーレイユニットが『青眼の白龍』だけになつちまつた……！だが！そんなモンスター1体ぐらいは、次のターンの引きさえ良ければ……！」

もちろん、次のターンなど来る筈もない。

「只のモンスター1体ではありません！『真青眼の究極竜』は、フィールドに他のカードがない孤高の存在であるとき、3回攻撃が可能です！」

追加攻撃のコストとして、2枚目の『真青眼の究極竜』が墓地に送られる。ちなみに『真青眼の究極竜』には、墓地にいる自身を除外することでのブルーアイズを対象とした効果に対するカウンターが効くものだから、「それコストになつてねえだろ!?」とドッペルゲンガーと驚愕したのも無理はない。

右の首から解き放つは。

「無敵のアルティメット・バースト!!」

『The Seven Sins』は、またブルーアイズを蜘蛛糸で磔に、しかし今度は自らを守る盾として利用した。

そんなことをしても、攻撃力では負けているのだから、屈折し、或いは貫通したレーザーがドッペルゲンガーを射抜くことに変わりはない貫通したレーザーがドッペルゲンガーを射抜くことに変わりはない

ない。

真青眼の究極竜／攻4500

真青眼の究極竜（2枚目）（EX、デツキ→墓地）

《VS》

N o. 77 The Seven Sins／攻3400

（戦闘破壊）

ドッペルゲンガー LP1400→300

「クク。はつはつは！」

『The Seven Sins』から『青眼の白龍

』が解放されたのを見届けて、ドッペルゲンガーは軽やかに笑う。まだ何か発動出来るカードがあつたのかとキサラは警戒したが。

「俺の負けだよ。これが本物様の力か！ さあ撃ち込んでこい！ 偽者らしく、悪役らしく、敗者らしく、道化らしく！ 俺も『The

Seven Sins』も、盛大に吹っ飛んでやるからよ！」

指先でチョイチョイと挑発してくる偽者に、キサラは小さく「ありがとうございます」と返した。

いつかのゲームの自分のように、身体を大の字に広げて攻撃を受けようとしたのなら、自分自身を断罪するような心境になつたかもしけなかつたから。

ならばあとは、『偽者の敗者』の演目に対し、『本物の勝者』の姿で応えるのみ！

「コストを払い、3回目の攻撃！ これで最後です！

最強の、アルティメット・バースト!!」

『The Seven Sins』は、もう動こうとしない。

残つた左の首から、無抵抗な兵器とヒトを吹き飛ばすには過ぎた攻撃が繰り出される。

だがそれでいい。

フィナーレには何故か、全力を出しあつた2人の、何処か爽やかな礼節があつた気がした。

真青眼の究極竜／攻4500

青眼の双爆裂龍（EX、デツキ→墓地）

## 《V.S》

No. 77 The Seven Sins / 攻3400

(戦闘破壊)

大罪の名を冠する闇のナンバーズが煌めいた。爆風、閃光、電流、斬？。あらゆる破壊のエネルギーが、八本の脚と、重厚な装甲を襲い――。

「おお――『The Seven Sins』が……！ 最強ナンバーズの、一角が……！」

神に匹敵する機構。七つの大罪と名だたる四体ものモンスターを重ね合わせて降臨した使徒は、ついに主人への遠慮も何もない大爆発を起こして破壊された――。

ドッペルゲンガー LP300→0

「ぐ……！ うう……!! うおおおおおおお――ツツ!!!」

予告通り、ドッペルゲンガーの身体が何度も錐揉みしながら派手に宙を舞い、無様な墜落の後にはさらに弾みながら転がっていく。そして転がった先で大木にぶつかり、それをへし折ってしまった。

……ドッペルゲンガーとキサラは全く同じ身長と体型なのだが、やれと言われても自分にあんな派手なアクションは無理だろうなど、キサラは妙な感心すら覚えた。

「クソ……。やはり『ジェムナイト・セラフィ』に『幻影霧剣』を使うべきだつたか……？」

「……まあそれでも、『ドロドロゴン』と『白き霊龍』が並ぶところまでは行けますけどね。でも……」

デッキをシャツフルする理由とタイミングが変わるから、『青眼の亜白龍』を引けたかどうかは分からない、とキサラはイラストが消えたそのカードを見せながら擁護した。

「お前の正体はそのカードの精靈か何かなんだろう？ キサラ――いや、『青眼の亜白龍』。どおりで強いはずだよ」

「……まあ大まかに言えば」

瀬人に破り捨てられた4枚目の『青眼の白龍』が、パラドックスの手で『キサラ』の人格と共に歪に復元されて『Sin 青眼の白龍』と

なり。その後瀬人とのデュエルの後に消えるはずだったところを、他の3枚の『青眼の白龍』から力を分け与えられて『青眼の亜白龍』として生を受けた——などという話は、する義理も時間もないようだつた。ドッペルゲンガーの身体は黒い靄となつて欠けつつある。

「そういう貴方は結局何者なんですか？　なんでこんなことを？」

「ドッペルゲンガーだよ。ドッペルゲンガーといつても、『未界域のドッペルゲンガー』だが」

偽者は、自分の正体だけでなく自分のデッキの出自も語り始めた。「我ら未界域は、デュエルモンスターズ界のユーマリア大陸にて、つい最近生を受けた。Unidentified Mysterious Animal——通称UMAへの、人々の信仰と恐怖を足掛かりにな」

だが原典が原典なだけに、タダで見つかって、他の凡百なカード達のように使役されるのは、プライドが許さなかつたのだという。

「だからせめて、誉れ高く広めてくれよ——。伝説のブルーアイズにすら肉薄した、未だ開かれざる界域に潜む、恐るべき獸性を！　ククク……ハーハツハツハ——!!」

そのままドッペルゲンガーは、燃え尽きるように黒い靄となつて消えていった。地図にない川も含めて景色も崩れて移り変わり、跡に残されたのは、つい先ほどまで使われていた【未界域】デッキだけだった。

結局ドッペルゲンガーはどうなつたのだろうか。存在まで消えてしまつたのか、カードの中でも生きているのか。そんなことに思いを馳せながら黒い靄をしばし目で追つっていたキサラだつたが……。「うつ……。つ、疲れた……！」

勝つた安心感で緊張が解けてしまい、膝が抜けてしまつた。それだけの疲労とダメージを耐えきつてデュエルしていたということだ。

そこへ幸か不幸か、ドッペルゲンガーの残滓とは別の黒い靄が拡がると、その中からキサラと似た服を着た大人が3人、横たわつた状態で現れた。

ドッペルゲンガーに襲われた行方不明者たちだろう。それだけな

ら『幸』だつたのだが……。

「えつ……？ なんでこんなに人質の管理が難なんですか……？」

3人とも明らかに顔色が悪く、うなされているように呼吸がおかしく、服の濡れ方は大量の汗によるものだつた。

おそらく、快適とは言い難い空間に幽閉されていて、まともな食事を与えられていなかつたに違ひない。

「いつたいどうすれば……」

無線で助けを呼んでも、合流してから森を抜けるには相当の時間がかかりそうだ。

合流を待たずに3人を担いで森を抜けるか？ キサラの『今の』体力と体格では無理だろう。

そうやつて迷っている間にも、高温多湿の熱帯雨林は、人質3人とキサラの体力をじわじわ奪っていく。さながらマンモスの墓場と融合させられた究極竜のように。

「……人の命には、変えられませんね！」

キサラはどうとう腹を括つた。一番確実な手はこれしかない。  
瞬間。キサラという人間の身体は、強い光の中へ消えた。光の中から広がつたのは、白い翼——。

## TURN · END

『南米に実体あるブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン出現!? KCの新技術か? 新手の未確認生物か?』だと? フン。『青眼の白龍』と『青眼の亜白龍』の違いも分からん記者は適当なことを書くものだ「すいません、他に方法がなかつたものですから……』

数日後のKC社長室では、瀬人とキサラがパソコンでネット記事を追っていた。

あの後結局。

『青眼の亜白龍』としての姿を顕したキサラによつて、行方不明だつた3人は病院まで直送された。その後『青眼の亜白龍』は森まで飛んで戻り、キサラはそ知らぬ顔で森の捜索隊と合流したのである。

もちろん森と病院を往復する間に目撃された『青眼の亜白龍』がニュースになることも覚悟の上であつた。

「まあ構わん。むしろ良い判断だつた。お陰で犠牲者ゼロで解決できただからな。やはりお前に任せて正解だつた」

例の3人はやはり一刻を争う病状だつたが、『極めて速やかな』搬送のおかげで一命を取り留めた。他の昏睡や発狂の症状で苦しんでいた面々もドッペルゲンガーの呪縛が解けた故か、無事に快方に向かつているとのことだつた。

かくして、南米のドッペルゲンガー事件は、キサラの活躍によつて決着がつき、南米海馬ランド計画も再起動しつつあつた。

「質量を持つたソリッドヴィジョンなんぞ技術として確立しておらんから、報道に関しては知らぬ存ぜぬで通せば良かろう」

「あつ、でも! こつちは確立しましたよ!」

そう言つてキサラが瀬人に見せたのは、あの『青眼の亜白龍』だつた。ドッペルゲンガーとのデュエル中とは違い、羽ばたいている姿のイラストが焼き付いている。

「もう私以外、というか貴方が使つても大丈夫です。貴方が持つてて下さい」

手渡されたそれを見た瀬人の感情は、到底言葉で表せないものだつ

ただよう。その強さと美しさに魅了され、このカードがいま自分の手元にある事実への感動と愛おしさが溢れる。

だが実際に口にしたのは

「……やつぱりもうちよつと、お前が持つてた方がいいんじやないか？」

大喜びでテツキに入れてくれるとばかり思っていたキサラは意表を突かれてしまう。

「ええー？ でも私はオリジナルの力を借りないとフィールドに出られませんよ？ 効果やイラストも凄く気に入つて貰えると思つてー

「……俺が破いたせいだと思うと、どうもな」  
デツキに入れられないから破り捨てる。『

力場にてる

たのだ

「……でも、貴方は救つてくれたじやないですか？」

「盗賊は母を殺されて道具として売られるところだから私を救って生きる誇りをくれたのは貴方だったでしょう？」

「町で迫害されていた私を助けてくれたのも貴方だつた」

「ほんのわずか1ヶ月程度でしたが、玉宮で貴方に囲まれながら過ごした日々は、私にとつてかけがえのない時間でした」

「貴方への愛と、自分自身への罪悪感を拗らせて……パラドックスに利用させていた私を救つて、新しい人生をくれたのも貴方でしょう？」

?

「その人生は、『キサラ』としてだけではなく、4枚目のブルーアイズ……。『S·i·n 青眼の白龍』から生まれ変わった『青眼の亜白龍』としてのものもあるんです。ワガママかもしれません……私は、人間としても、カードとしても……。貴方の傍に居たいんです」

キサラが語りかけている間、二人の青い眼は互いを見つめ合い、言葉だけでなく眼でも会話をした。

万感込めた自分の必死さが恥ずかしくなつて、不意にキサラは顔を逸らしてしまつた。

「それに！ 保険としての意味もあるんですよ！ この人間としての身体に何かあつても、カードが無事なら手の施しようがありますし！ カード側がまた破かれたらどうなるか分かりませんが……。デュエル中に破壊されたり、融合やシンクロの素材になつたぐらいなら、『キサラ』の方には大して影響出ませんし！」

そうやつて取り繕う彼女の姿が可愛らしくて、瀬人は笑みを溢しながらどうどう折れてしまつた。

「分かつた。本当に負けられない闘いのときだけ、大切に使わせてもららう」

『青眼の亜白龍』が瀬人のデッキに入つたところで、話はまた変わる。

「ああ、そういうえば。こつちのカードはどうしましょうか」

ドッペルゲンガーが残した、【未界域】デッキの話だ。

「本当は誰にも見つかりたくないが、どうせ見つかるなら派手な花火を打ち上げたい、というのが奴の動機だつたか？ くだらんことで我が社の足を引つ張りおつて……」

デュエルモンスターズのカードは、表向きはI2社が全て作つていることになつてゐるが、実際はそうでもない。デュエルモンスターズ界から流れ着くカードや、カードの精霊をはじめとした何者かの意思で勝手に増えたり効果が変わつたりするカードが存在する。古代遺跡からカードが発掘されるという意味不明なことも起こつており、ものはや大会などでは「デュエルディスクがエラーを吐かなければOK」ということになつてゐる。

『クリティウスの牙』『オレイカルコスの結界』『光のピラミッド』『青眼の亜白龍』もある意味その定義に当てはまつてしまふので、もう瀬人も気にしていない。ある意味諦めたとも言える。

「でも、強かつたですよ？」

「まあそうだな。その強さに免じて、南米の海馬ランドには【未界域】のアトラクションを作つてやるか。I2社と連携して各種調整と

カード販売計画を進めてくれ

「はい。じゃあそろそろ開発室に戻りますね！」

そう言つて社長室を去ろうとするキャリアウーマン然とした彼女が、三千年前から意識に断絶はあれど記憶と存在を保つてきた人格だとは、知らない者からすれば信じられないだろう。

今のキサラは、KCの権力で戸籍を偽造し、KCの開発部門で働いている。確かに一般教養などは働きながら覚えていく必要はあつた。しかし、パラドックスと3枚のブルーアイズに由来するカード知識と決闘者としての腕は、開発部で大いに役立つことになった。

これからも、彼女は自分と共に歩んでくれるだろう——と瀬人が思つていると、「嗚呼、そういえば」とキサラが扉に手をかけがてら、振り返つて訊ねた。

「おれが実は、ホンモノと既にいれかわつている、という可能性は、かんがえ——」

「茶番はいいから胸を張つていけ、『本物』。偽者だつたなら会つて3秒で気づいている

「ふふつ、からかつてすみませんでした！」

ニコツと微笑んでキサラは仕事に向かつた。

『キサラ』として海馬瀬人を殺し、『S·i·n 青眼の白龍』としてパラドックスと共に世界を滅ぼす破滅の未来は潰えた。

『キサラ』としてKCで働き、『青眼の亜白龍』として瀬人や3枚のブルーアイズと共に闘う。

それが、瀬人とキサラが勝ち得た真実の未来だつた。